

二八〇  
 亞には虚無黨の蜂起するあり、日耳曼は社會黨の爲めに驚かされ、佛蘭西は又無政府黨の爲め、人心兢々たるのみならず、併せて方さに資力限りの境に瀕せり、素より近時流行する無政府黨の罪惡には正義もなく、口實もなしと雖も、凡そ此世界に起る事件には其原因なきものあらず、今や大陸の労働者は甚だ低廉なる賃金を以て長時間の苦役を爲し居れり、又若し雖にもあれ以太利の近報を讀めば、同國に於ける農夫の憫むべき状況を知らん、要するに大陸諸國に於ける労働者の賃金は甚だ低く、其働く時間は長し、而して又佛蘭西其他に於ける小地主も亦決して之に優るべき地位にあらざるなり、予は八時間労働の希望に對して大なる同情を表するものなれども、一昨年「ハイドパーク」に於ける決議は、賢しこくも、是は諸國同一にせざるべからずと主張せり、去りながら現今の兵制にして連続する間は、到底労働時間の減少は期し難かるべし、此八時間労働の目的を達せんには、唯軍事費を減ずるに在り、今や陸軍と海軍とを維持するに必要なる租税の爲め、歐洲に於ける

男女は少くも一日に付、必要よりも一時間多く働けり、事實に於て歐洲の宗教は耶蘇宗にあらずして、軍神崇拜なり、噫吾等は到底戦争を禁止する能はずと雖も、少くとも平和の尺度に重きを置くを得べし、乃ち先づ勉めて諸外國と友誼を保ち、之を待つに禮讓と正義と寛仁を以てすべし、多くの國は愚かにも、其財政上に困難を感ずる甚しきにも拘はらず、互に戦を挑まんことを企圖す、「クウバー」之に就て歌て曰く  
 山岳隔斷して國民を互に敵たらしむ、若し否らざりせば、同種の涓滴が合して一となるが如きものを  
 然れども是よりも尙ほ惡しき障壁は、國民が自ら互に作るもの是なり、關税を以てする障壁是なり、更に惡しきは根據なき嫉妬心と惡意に基づく障壁是なり、而して是等の障壁は實際一方に於て、眞に不其の企圖を劃し居らざるに拘はらず、他の方に於ては宛も之を劃し居るかの如くに邪推し、以て止むを得ざる次第となし居るなり

此の屈國交上の關係を左右する嫉妬、敵對の同一精神は悲しくも亦内國の政策を困難ならしむ、然れども他を侮慢するとは議論にあらず、寧ろ我弱點の自白なり、此の如き時に當りて政黨と政黨との間、國民と國民との間に於て、失路の兄弟に對し復讐として戦争や紛闘を以て脅迫する代りに、神の如き手段を執りて、此同胞に教ゆるに互に相愛し、互に相敬すべき途を以てする程に、吾等自ら謙讓せば其幸や果して如何

革命は赫薇水にては爲し遂げらるゝものにあらずとは屢聞く語なれども、世界に於ける憲法上の大改革にして、武器よりも寧ろ議論に依りて爲し遂げられたるもの尠なからず、假令武器を用ゐたる場合に於ても、大抵は筆の力、劍に勝さり、思想は銃劍よりも更に力ありき

「ミル」曰く吾等の今住むが如き人類進化の、未だ比較的熟せざる時世に在りては、人は實に其生涯に於ける行動上の一般方針に關し、相互の間に、まことの不調を惹起せしめざる様なる同情の完全は、得て期すべしと想像する

能はず、然れども既に社會と云ふ感覺の十分發達したる人に在りては、最早他人を認めて悉く彼れ自ら幸福の手段を得んが爲め、已れに敵抗するものなりと思ふとなし、又已れ自ら我目的を爲し遂げんが爲め、他人の失敗を見るを喜ぶと云ふ考は有せざるなりと

公民たる一部分を適當に、且つ善良に盡くさんとする爲めには、「パーク」の語を假りて言はんは、注意を加えて我心を鍊磨し、總て吾等の天性に屬する才能と、正實なる感覺を養成して、之を十分に發育せしめ、原氣を以て溢れしむると必要なり、又私生涯に於ける愛すべき性格を移して國家の用務に供し、愛國者たると同時に、紳士たるを忘却せざると必要なり、……凡そ公生涯は權勢と氣力の位置にして、時計の上に眠りて張番を怠る兵士も、敵に款を通する將校も、共に其義務を犯すものたり、左れば汝の權利を要求せんよりは、寧ろ先づ汝の義務を盡くすを思ふべし

「ボリングアローク」聊其愛國の精神に就てと題する小著中に「ソラテラス」の

所言を賞讃して引用せり、其言に曰く、縦令ひ最劣等の業と雖も人は習はぬ商業に従事するとなし、然るに誰にても總ての商業に比すれば、最も六つかもしき政府といふ業に對して、自ら十分適せりと考ふと、ソクラテスの斯言たるや、當時希臘に於ける其經驗より起りし語なれども、若し彼をして今日の英國に住ましむるも、蓋し此説を變ずるとなかるべし。

吾等は實に差迫りたる各種の問題を有せり、吾等は我兒童を教育し居れりと雖も、恐らく其方法を目して、完全なりと言ふものは一人もなかるべし、資本と勞力との争は我商業を飢やし、我製造業を妨げ居れり、若し此狀にして連續するなれば、必ず遂には勞力に對する需用を制し、以て賃金を引下ぐるに至るべし、吾等の大都會の健康は尙ほ改良の望ましき餘地多し、學術に於ても吾等は僅に初歩を爲したるに過ぎず。

且夫れ進歩の問題は姑らく措くも、此社會の日々の生活は斷斷なき勞力を要するものなり、議院の評議、地方事務の處理、貧民法の施行方等、事實に於て

此社會の事物は矢張個人の事務同様、多くの注意を缺くべからず、而して今や其傾きは、適當か不適當かは知らざれども、何事も團隊組織増加の方に向へり。

貧民は吾等の國にも常に存在す、然るに或る他國に於けるが如く、我國に於て社會黨及び無政府黨を歓迎する感情なきは、畢竟我貧民法と、自由貿易と、并せて彼等が外形上の狀況の他國ほどに不満足ならざるに因るとはいへ、又實に其一大原因を數多き慈善方法と、富者貧民間に存する最大なる同情に歸せざるを得ず。

熱心は疑ひもなく世界を動かす槌たりと雖も、顧みて効なき試験の爲めに如何に多くの時間と金錢とが空費せられしかを憶へば、轉た悲みなきを得ず、而して右等の試験は業に既に再三失敗し、初めは之れが爲め利益を得んと企てし其人も、其結果を得る代りに寧ろ害惡を得たる故、無用はサテ置き却て前よりも一層不尙の境に陥れり、蓋し貧民に對する事業は心神の働き

と共に併せて好意の感情を要するものなるを、十分服膺し居らざりし故なり

重もに入用なるは必しも金錢にあらず、此事に就き甚だ高尚なる智識を有する「セウエル」嬢曰く、貧しければ貧しき隣人ほど、之れが救卹の爲め要する金錢は少々にて済むべし、少くとも直接に費やすべき金錢は少々にて済むべしと言ふとは空談に似たりと雖も、吾れは之れを眞なりと信ずと、思ひ遣りと、愛情とは黃金にも優さり、時間を與ふる人は金錢を與ふる人よりも爲すと多し、實際に於ては經驗と熟練となければ、金錢と熱心も善根を施すよりも寧ろ害を與ふる恐あり、頗る危険なり、何事によらず、方法の宜しからざる事業より來る害は、其事業を爲さずに打捨て置く爲め起る害よりも多かるべきが故なり

希望と、氣力と、勇氣とを與ふるは金錢を與ふるよりも更に優れり、最上の助力とは人の爲め其困難を負擔し遣すにあらざ、唯其人をして自ら己れの

負擔に耐え、臆せず、恐れず、此生の艱難に當らしむる様、原氣を吹き込むに在り、原と人を扶助するは容易の業にあらず、澄明なる頭腦と、適當なる判断と、併せて温かなる心を要す

人の困難を助けんとするに當りては、其獨立心を害せざるとに注意せざるべからず、何事にあれ人の爲めにする場合には常に其人より、自ら働くこと云ふ刺激心を奪ひ去り、其獨立の感覺を弱むる憂あり、凡そ他の物に身を寄する總ての動物は、自ら純然たる寄生物たらんとする傾を有する者なり、故に出來得る限り匏は多く之に與えず、夫れよりも自ら之れを得る途に出でしむると肝要なり、直接の扶助を與えずして、自ら己れを支ふるとの出來る様に助け遣ると肝要なり、吾等は先づ、吾れは人の責任を破壊し居るものなるか、將た其責任を負はしむる爲め、人を助け居るものなるかを自問せざるべからず、寔に此世界は錯雜を極め居るものなれば、吾等は皆、止むなくして多く我隣人に負ふ所なきを得ざるべしと雖も、出來得る限りは誰れも皆己れ

の足にて立たざるべからず

吾等は我思想に人の一致するものを期すべからず、我爲すべきは、唯其人自らの爲め最上たるべき總ての事を實行せしむる様、之を助くるに在り、自ら改心して其勉めを爲すべき様、之を勵すに在り、蓋し金錢を不相應に附與するは多く濫費者の爲す所にして其心事は、敢て眞實なる同情に基くにあらず、寧ろ自ら心の憂苦を省かんとするに在れども、斯の如くにも尙は社會の爲めに盡くすときは遂には其報酬を見るに至るべし、即ち吾等は自身の爲めにする事よりも、人の爲めにする事に依りて、恐らく多くの幸福を樂み得べく、又人の爲めにする事は、縦令ひ卑しき勞働にても尙ほ神聖となるものなり

如何に其業務が卑下なりとも宜しく之に汝の心を投つへし

「サア、チイ、モア」英國の法律家、千五百三十五年に死す、曰く如何なる部分たりとも自ら受けし所は、出來得る限り善く之を演し、我最上力を盡くすべし、

……若し今風俗習慣に依りて固まりし弊惡を矯めんと欲して、矯むる能はざるとも、其故を以て國家を抛棄すべからず、風力を制して之を鎮め得ぬ故に、船を暴風怒濤に委ね去るべからず、……唯須らく事物をして其目的を得せしむる爲め、之を美つくしく、明らかに取扱ふとに勉むべし、縦令ひ之を變じて善たらしむると能はざるとも、セメテは、甚しく悪しくならざる様に仕向くべし、總ての人が善人なるにあらざるよりは、總ての物の善たるとを期すべからず、而して斯の如きは中々遠き先の事なるべしと

去りながら總ての人が益、其の義務を盡くすに力むれば力むる程、吾等は益近く、益速に此境に接近すべし、果して吾等にして總て之を試みん乎、其幸福や如何計りなるべきか、恐らく之を言明し難かるべし、吾等は總て英雄となり絶大なる偉功を以て此世界を驚す能はざるも、活潑なる所業と、眞理とを以て我生涯を充たし得べし、貴重なる心魂の爲すべき貴重なる任務は常に此に存在するを見る」

英人として生きるゝは大なる特權なり何れの國か英國の如く個人の最大自由を享有するものあらんや

法律の前には何人も平等なり

何人にてても有罪の證據、舉がる迄は無罪と認めらるゝなり

何人にてても全一の罪にて二度の吟味を受くるとなし

總て吟味は之を公開し、囚人は面たり其求刑者と相對するを得るなり

何人にてても自己の事件に就て自ら判官たるを得ず、又何人にてても法律を無視するものなし

故に費額の如何と、危險の如何とを問はず、國の爲めに働くは一の神聖なる

義務となれり、危難と死を恐れて、國に盡くす務や、己れの名譽を顧みざるも

のは眞に生き甲斐なき人なり、死は早晚、避くべからず、徳性の名譽は不朽な

り

然れとも國に盡くす務にして危險に瀕する場合は比較的、僅かなり、唯之れ

が爲めに吾等の安逸と、閑暇とを多少犠牲となすを要すると、又必要の程度に於ては他に譲るなきも、見たる所にては豪宕ならずして、寧ろ倦怠を惹起すべきが如き勤務の爲めに、或る時間を投つとを要するのみ

委員、選舉、集會、演説、寺會、州會の如き公務は、何も別に面白きものにあらず、敢て想像を幻惑せしむるにもあらず、又心神を激昂せしむるにもあらず、然れども平時に於ける投票は猶ほ戰時に於ける奮撃の如し、其平和にして血を流すとなきを以て効力少しと謂ふ勿れ、投票は權利にあらずして義務なり

投票する準備を爲すも亦同じく義務なり

人の公共事務に盡くす無賃勞力の高は驚くべきものあり、而してイツ迄も連続して斷ゆるとなきを望む

何人と雖も其身も亦同じく、國家公共に對して多少貢獻する所なくんば、總て公共の惠に浴する權利なし、而して其貢獻する分け前に就ては、人各同一の時間と機會とを有するものにあざれば平等均一たらざるも致方なし

「マ、イヨン」曰く私産は一生懸命にて作るほどの價值あるものならずと、必しも家宅や、食料や、衣服計りが必要なるにあらず、是等は最高の身分に於ても尙ほ必要なるものにあらず

我隣人を愛する爲め、所行、助力及び恩惠の基となる本心の爲め、人類の過失を停止し、人類の錯雜を清掃し、并せて人類の不幸の大きさを減却せんとする希望の爲め、此世界を吾等が発見せしよりも更に善良に、更に幸福に、子孫に傳えんとする高尚なる慾望の爲め、約言すれば社會的と稱せらるべき卓絶なる意思の爲め、又管に他人の幸福の爲めのみならず、又吾れ自らの幸福の爲め貢献する所あらんが爲めに、費やしたる時間は、最も狹隘偏私の意見を以てするも、尙且つ之を失ふたるものなりと謂ふべきにあらず

「ハットラア」僧正千七百五十二年に死す曰く此生に於ては誰れにも通有なる神惠あり、平和充實、自由及び健康なる季節是なり、然れども我同胞に對する眞の恩惠は、更に嚴正なる意義を以て、吾等に共通利害の觀念を興ふべし



何となれば吾等が人を愛する其程度に従ひ人の利害、人の快樂、及び人の悲痛は又吾等自らのものと成り來たるが故なり、吾等自ら私善の觀念を起し之を我ものと認むる所以は畢竟自愛より來る、我隣人を愛するとは、吾等に教ゆるに、斯くせば隣人の善心好意は自ら我身の上に適用せられ、吾等も眞に隣人の幸福を頌有するものなりとの心を以てす、即ち此恩惠の原則は我胸中に於て同胞の利害に注意すべきことの賛成者となる

更に「マアカス、アウレリウス」の貴き語を假用せしめ、彼れ曰く汝に次どる神をして、男らしくして成年に達し、政治に關係する羅馬人にして、統治者たる人の後見者たらしめよ、而して此統治者は已れを喚び起す合圖を待ち、宣誓も要せず、又他人の保證をも要せず、直に行かんとする人の如くに其位置を得たるものなるを要すと

吾等が公共の義務に費す時間は敢て犠牲となるものにあらず、必ず其報酬を齎らし來るべし、吾等は善を爲すとの驕奢なるを知る

彈丸の時に當り、公共の大利害の爲めに、我一個の利害を無にするは容易のことにあらず

或る人は面倒を興え、或る人は又之を引受く、誰れにても望み次第にて勇者ともなり、價値ある愛國者ともなるを得べし、誰れにても亦、少くとも同胞を一層健康に、一層幸福に、一層善良に慕らさしむべき様、之を扶助する其行爲に與かるとを得べし

唯斯くありてこそ、汝は早晚必ず汝自ら心に問ふべき疑問に對して、満足なる答を興ふるとを得べし、其問とは即ち、眼光燦々たる壯年の黄金時期より半世に至る迄、汝は神と人との爲め、將た正義と眞理との爲め何のなす所ぞと云ふと是なり

## 第十二章 社會的の生涯

英國人の家は何れも皆其城廓たるとは吾等の常に誇る所なれども右にて

は未だ不足なり、其家は又實に其家庭たるべき筈なり、城廓たるとは一に法律に依りて受くる權利なりと雖も、之を眞の家庭となすは其人自らの上に繋る

何によりて之を家庭となすを得べき歟、愛情と同情と信任、是なり、兒童時期の肥臆、兩親の深切、壯時の洋々たる希望、姉妹の標置、兄弟の同情と扶助、互ひの間の信任、共通の希望、利害及び悲哀、是等は實に家庭を作り、且つ之を神聖ならしむるものなり

愛情なきの家は、城廓たるべく、又宮殿たるべしと雖も、家庭にはあらず、愛情は眞の家庭の魂なり、愛情なき家の家庭にあらざるとは、猶ほ魂なきの軀體の人にあらざると異ならず、諺に曰く

快濶なる心を有する人は、斷えず饜飴に在るが如し、天帝を恐るるとの少きは、巨万の財を積みながら、其中に憂苦を懐くに優れり、菜蔬の晩食も愛情の伴ふあれば、肥太りたる牡牛の肉の嫌惡心を包むものに優れり、三尺



の蝸盧も平穩無事なれば喧嘩口論の斷間なく、夥多の犠牲を以て充ち満ちたる大厦に優されり

一九六

吾等は家庭を以て、帝王や國家の暴力に對する避難所たる城廓として之を貴ぶものにあらず、此生の面倒と心配に對する避難所として之を貴び、吾等が世界の上に於ける此航海中には、必ず逢遭すべき風濤に對する、安息の天として之を貴ぶなり、最も成功多き生涯に於ても尙ほ右の如き時は來るべし、到底繁昌のみが獨り幸福や平和を保ち得べきにあらず

人は「エデン」の花園に於ても尙ほ獨棲すべきものとして作られず、「セント、ピ」の僧正佛人、千八百十四年に死す曰く「孤寂なる心魂は天に在りてすら致方なしと、凡そ人の心は、家庭に在らざるべからずと雖も、其働くや外に於てする方宜ろし、人は専ら社交的のみに作られず又は孤寂的のみに作られず、双方に併せ適するを可なりとす、又實に是が必要なりと謂ふべし、テニソ」が「園丁の娘」と題する詩中に曰く

全く隔しき世界の中にはあられども、又夫れかと云ふて全く其外にもあらざる我愛國の花は盛りなり、こゝには弔ひや婚禮や慶弔、交も鳴る鈴の響と共に、熱鬧なる市中の新聞の來るあり、若し夫れ幽遠なる綠陰の下に坐せん乎、風に傳はる寺の鐘をも聞き得べし、寺と園との間には草遷の三哩も隔たり、そこには悠々たる水の廣き流れあり、槽ぎ行く、餓の音も緩るやかにして、藻荇、微波に搖き、積荷も重き小舟は、寺塔を仰ぐ橋の三弧門さして、其中を進み行く

寔に造化の美や永々の樂みなり、去りながら空に輝やく天日も、心の中に輝やく天日のあらざれば何のものかは、我家族こそ密着敬崇、愛情の諸感を起す基なれ、即ち是れ文明の基礎にして起源なり、又實に吾等の最も貴き感覺と、最も高き性情を誘起するものなれば、即ち最上なる其の學校なり、天使も人を幸福ならしむるの外、何の爲す所かあらん

假令ひ汝の家庭は卑野俗趣、何の味もなく、シカも冷寒なりと雖も汝の身の置き所と汝の義勉とは其中に横はるなり、凡そ困難の大なる程、其報酬も亦富實なるものと知るべし

心痛や不義を辛抱するは苦役よりも難儀なり、是れ金銭や、時間や、勞力の犠牲に比して更に大なる生きたる犠牲なればなり

人を不幸ならしめんと欲するものは實に僅々たるべし、而して此僅々たる人は素より予が今述べつゝあるとを讀む人ならざるべし、概すれば心の缺乏に由りて起る不幸よりも、思想又は心術の缺乏に由りて起る不幸の方恐らく其數多からん、誰れにもあれ人に接するには快濶なる微笑、深切なる言語、嬉れしそなる挨拶を以てすべし、身にとりて貴重なる人は、之を愛するのみを以て足れりとすべからず、又其人に、己れが彼を愛するとを示さざるべからず、無識無稽、又は判断に乏しきが爲めに、却て最も之を愛し、又最も之を助けんと欲し居る其人を傷くるもの多し

奨勵の意を含みたる數語の爲めに、如何ばかり助けられ、如何ばかり氣を強めらるゝかは、皆人の之を知了する所

「チエスタアフェルド」卿曰く、凡そ一般に人の知ると少なきものゝ中に就ても、愛憎の念ほど分らざると甚しきものは稀なるべし、人は己れの過れる嗜慾の爲め、又は目先の明かぬ爲め、否な屢己れの過失に偏する餘り、愛する人を傷く、又人を嫌惡する時には、即ち時ならぬ感情と憤怒とによりて、自ら傷くものなりと

吾等の生涯は友朋の中に在りても、尙ほ自ら索寞の傾を免れず、吾等相互の間は骨なる鐵格の中に幽閉せられ、皮なる帷帳の後に隠蔽せられ、宛も個々別々の島上に在るが如くなり

嗚呼人の友を知る何ぞ夫れ淺きや、親族に對しても亦然り、同家族にして實際、異越の思を爲すもの少なからず、其心の動くや、猶ほ平行線の走りゆくも絶えて相會する時なきが如く、實に互に觸接するとなきなり、最愛の心にし

て吾れ自らの心に亞くもの(即ち妻のとなり)と雖も、尙且つ吾れは何故に笑ふか、吾れは何故に嘸むか、其理由の一半をも知る能はざるなり」

吾等は天候や、秋收や、新小説や、政界の状況や、隣家の健康や、失敗や、眞に此等の内部に關係なき事柄に就き語を聞はず、即ち實際吾等の最も多く談ずるとは最も通常にして最も要用ならざるものなり、而して最も多く話すが如くに見ゆる人は其實、最も少く話すとを有する人なり

談話の一大技術たることを知了するもの少なし、一家族が、心から結合せざるべからず、心から互に同情を表せざるべからずと云ふに就ては、唯愛情と善良なる意思とを有するのみを以て必要とすべからず、我心中を言ひ顯らばし、又人の心中を察するの術と、力が必要なり、若し人、吾れを楽しめずんば吾れ、人を楽しむるとに勉むべし

何事にもあれ、其心中に浮ひ來るとを、直に言ふと云ふとを誇る人、少なからず、實に誰れしも誠實に且つ淡泊にはありたきものなり、左れども談話は自

ら別ものにて、苟くも之を面白からしめんには多少勞苦する所なかるべからず

人は總て己れが家庭を幸福ならしむる様、幾重にも勉むるとを得るなり、腹黒き人は疑もなく、人を苦むるよりも己れ自らを罰すると多し、斯くて常に人を苦むるものは常に自ら苦む、其人の唯一の樂みとは即ち不愉快の謂なり

即ち既に樂しからず、此を以て決して幸福なるとなし、然れども言ふ迄もなく斯る人は、却て多く他人を憂苦せしむべきことを爲す、素より我周圍に在る人達を幸福ならしめんには、別段大なる犠牲を要する譯にあらざれども去迎、唯善良なる意思のみにては不十分なり、必ず之には心術と、勉強と、實驗を要す、凡そ善にもあれ、惡にもあれ、或る事を能くせんとするには先づ之れを實驗せざるべからず

深切にして思ひ遣り深き舉動は、驚くべき効力を有するものなり、古語に曰

く舉動は人を作ると實にや多くの人は其舉動に依りて成立し、又之に依りて落魄せり、彼の首相が閣員を選ぶに當りても、敢て必しも其人の才辯智能のみに重きを置かず、又并せて其人の舉動を察し、誰れにもあれ、外の人々と折合ひ善き人を採るなりと

粗暴は強力にあらず、時に却て怯弱の皮相たるとあり、セリスピヤは「マアク、アントニエ」をして「ブルウタス」の事を言はしめて曰く、彼れの生涯や濃厚なりき、而して造物者が起立して全世界に向ひ、是れこそ人なれ」と云ふ程、彼れの心中には色々の眞實和同し居たりきと

若し人の缺點を擧ぐべき必要あるときは、少くとも之を深切に言ふべし、殊に兒童に對して然りとす、兒童の少さき搖籃は成人の星斗燦然たる晴空より更に曇り易ければなり、ルーベンス「安土府の大畫家、千六百四十年に死す」は一筆を以て、能く笑顔の兒童を、泣顔に變ぜしむるを得るとは、曾て聞く所人の生涯に於ても其通にて、一言尙且つ喜憂を轉するに餘りあり、如何なる

場合にても穩かに話すべし、心と云ふ深き井中に落つる水は一滴なりと雖も、そが齧らし來る善と樂とは終に分明となり來るべし

内密に譴責し、表向に賞讃すると亦是れ一個の好原則なり、凡そ内密に言ひ聞かすとは自ら快く聞取られ、眞に深切上より來るとを感じ、大に効力あるべし、表向に賞讃するは一層人心を刺激するものにて、其報や必ず大なるべし

何は兎もあれ、若し人の過失を擧ぐべき機會に際せば、之を丁重にし、且つ又遺憾の色を以てし、耐えらるゝ限りは、決して憤怒嫌惡の情を顯す勿れ、アークイタス「紀元前四百年頃、タレントム」に名高かりし將軍にして、數學、哲學の大家、曾て其奴に語りて曰く、若し予にして怒り居らざりしなれば、屹と汝を罰すべかりしものと、怒れるときは、少くとも言語を發する前に、一息休みて考ふべし、マツチエー、アノルド「英國近代の詩人、千八百八十八年に死す」曾て最高なる老成人の特質たるべきものを引用して曰く、其寛恕、其參酌、其

行爲に就ての嚴正なる判断、并に其人に就ての深情ある判断と  
死は速かに一切を平等ならしむべし、左れば之を豫想して何人たりとも紳  
士に對するが如き禮讓を以て之を遇すべし  
辛抱の出来る限りは決して友朋を怒らしめ、又之を冷淡ならしむる勿れ、一  
たび分るれば最後なるとを記憶せよ  
或る言語は大陽の光線の如くなれども、或る言語には尖鋭か、又は蛇の噛む  
が如くなるものあり、若し疎賄、果して人の心に刻すると甚だ深きものたら  
しむれば、之に反して温言の如何に、多く樂みを人の心に與ふべきかは、之を  
知るに難からざる所、

「ジョラヂ、ベルベルト」「ウエルヌ」の詩人千六百三十三年に死す、曰く善言は殆  
んど代價を要するとなければども、大なる價値を有すと、偶然に下したる鐵錐  
が、技師の思ひ寄らざりし點を發見すると、少なからず、偶然に發したる言語  
の人の心を喜ばしめ、又悲ましむると、少なからず、

話すとが必ずしも常に必要なるにもあらず、曾て聞く「ピイター」が耶蘇を拒  
斥せし時、主は「ピイター」を見上げたり、其非難の意を寓したる悲しき一瞥は  
十分に於て「ピイター」は即ち出て往きて甚しく泣けりと  
寔に一瞥にして、酷だしき痛苦を與ふるとあり、之と同じく深切なる眼元の  
樂みを以て人心を鼓動せしむる場合屢、之れあり、久しく分れ居たる後の、手  
厚き歡迎は、如何に人の望む所なる乎、其中には吾れを思ひし心の知らるれ  
ばなり、又朝、出逢ふたる時の深切なる微笑は、曇りたる日をも輝かす程なる  
にあらずや、我愛する人と共に居れば、夫れて十分なり、  
餘り深く包む勿れ、我愛情を顯はすとを恐るゝ勿れ、縦し人を愛するとも自  
ら冷淡に見ゆるときは十分と謂ふべからず、温かくして深切なるべく、又、思  
ひ遣り深くして慈愛なるべし、人は多く勞苦に依りて、よりも同情に助けら  
るゝものなり、愛は金に優れり、深切なる言語は贈物よりも、喜びを人に與ふ  
ると多し

二〇六

「ベンジャミン・フニスト」米國に生れ英國に住みし大家、千八百二十年に死すの、何が彼を畫師となせしやと尋ねられし時、答て云ひけるには、我慈母の接吻なりきと、孔子曰く、家既に整はん乎、更に犠牲を供して何をか求めんと、友を選ふには大に注意すべし、友は此生の最も貴重にして最も美麗なる什器なり、ジョナテ、ヘルベルト曰く、善き仲間を作れ、汝も亦其一員たるべしと、西班牙の諺に曰く、汝が共に住む人を告げよ、吾は汝の如何なる人なるかを言はんと、己れ自らに對して、良友たらざる人は、人に對して、良友たると能はず、撰擇したる友は、徳性中の最も貴きものにして、我喜を倍し、我憂を分つ、女の友を撰擇すると亦全く重要なり、賢人にして「サイレンス」海員を迷はす、魔女の爲めに難破せしもの「ソロモン」の時世以來甚だ多し、「ミルトン」曰く、縦令ひ其心大なりと雖も、美しき偶像の女神に迷さるゝものは自ら偶像の穢に落つと

「アリイ」曰く、友朋は、人生の寶なりと、友なき人は、寔に不憫なり、殊に、己れの過

失に依りて此に至りし人に於て然りとす、  
「ケプル」英國の文學者、千八百六十六年に死す、が悲みて言ひし如く、確かに吾等は總て孤寂に暮らさざるべからざる必要はなきなり、尤も時折り獨居する自由を有することは、又可なり、若し絶えて隣人と相離るゝ時なかりせば、之を愛すること甚だ難ければなり

始終不平の原因を有すと思ふ考の起ると、自ら避け難き所なり、果して然れば、其時は堅忍と理解とを以て之に當り、且つ之を我友の地位になりて思ひ見るべし、何事も急くに及ばず、是れ造化の決して爲さざる所、古諺に曰く、最も急くことは最も悪しき速力なりと、左れば何事はサテ置き、決して事を暴急にすべからず、熟慮せよ、時を與へよ、終霄、苦みたる事も朝になれば大に趣の變はりて見ゆると常に少とせず

若し人を毀傷すべき書面を認めたる時は、明敏にして、事理正しきものと雖も、且つ之を翌日迄留め置くべし、遂に之を送らずして止む場合屢多し

出来得る限りの良友を作れ、悪友は一切友なきよりも更に悪し、諺に曰く  
 悪道に入る勿れ、悪人の路を行く勿れ、之を避けよ、之を過ぐる勿れ、之より  
 轉じて過ぎ行くべし

彼等は悪事を働きたる場合を除く外、眠らざるべし、即ち彼等は誰れかを  
 墮落せしむるに非らずんば、眠ると能はざるなり

彼等は悪業の麴を喰ひ、暴戾の酒を飲む

然れども正道は輝く光の如く、十分なる日となる迄、層一層輝くなり、  
 悪人と愚物とを、友朋となすと素より大過失なれども、之を敵とするとも亦  
 妙ならず、其數甚だ多ければなり

「ラム」滑稽的に言ふて曰く、物を贈りくれる時には、不在の人も大切にすると  
 然れども深切耐忍並に同情は贈りものよりも更に多く爲す所あるべし、  
 友朋は何物にもあれ、呉れるべきものは要求して可なりと雖も、去述、假せよ  
 と迫るべき筋合なし、借る人とも、貸す人ともなる勿れ、金を貸すときは金と

友朋と并せて失ふべく、又借るは節約の刃を鈍らしむるものなり」とは、セク  
 スピヤの語なり、「ソロモン」も亦、吾等を警めて曰く、人の爲めに保證に立つも  
 のは其爲め大に苦むべし、之に反して保證を嫌ふ人は確實なりと

友朋は多くの危難より吾れを救ひ、且つ我多くの憂苦を免れしむるものな  
 り、「アウガスタス」が其娘の「シュリヤ」の爲めに耻をかゝされし時、語て曰く「ア  
 シラツバ」か「シイセナス」が生きて居たらんには、斯る事は起らざりしものと

一たび良友を得たるときは、之を失はざるとに勉めよ、汝が有する友朋にし  
 て其良友たるとの知れたるものは、鐵條を以て之を汝の心魂に縛し置くべ  
 し

此等の友朋に對しては、縦令ひ些少なりと雖も不平の原因を與ふる勿れ、  
 縦令ひ死の爲めに引離さるゝも、尙ほ再び相見るの好望あり、素より其損失  
 を償ふに由なしと雖も、尙ほ友を失ふも年々歳々、如何に天國に於ける我貯

蓄が増しゆくかを樂むと心の中の慰みなるべし」  
 生涯に於て最も重要な段階は結婚なり、愛情は總ての天性を優美ならしめ、且つ之を奮起せしむるに似たり、地上に蠢爾たる蟲を、空中に翩翻たる蝶に進化せしめ、春風に其羽翼を粉飾するも、益に點するに光を以てするも、皆是なり、或は禽聲を喚び起し、或は詩人の歌調を促すも皆是なり、之に逢へば心なき草木も自ら感ずる所あり、花も亦富麗なる色を以て開き満るぞかし」  
 「シモナイヅ」希臘の詩人、紀元前四百六十八年に死す、曰く人の爲めには良妻より大なる幸福あるなく、悪婦より大なる責苦あるなしと、諺に曰く  
 雨天の斷間なき點滴と、さかなき婦人と相似たり  
 姦びすぎ女と高樓大廈の中に暮らさんより、天井低き隅の方にては獨り住むこそ勝るなれ  
 妻の撰擇に關し有益なる助言を與ふると、恐らくは容易のとにあらざ、唯少しく考ふれば自ら合點する所あるべし、先づ餘り早く結婚するは宜しから

ず、若き男女の結婚は「サア、エツチ、テイロア」(詩人、千八百年に生る)が言ひし通り宛もかよわき一蔓草が同じ蔓草の扶助に種ゑられたるが如くなり、次には金錢の爲めに結婚する勿れ、又金錢なくして結婚する勿れ、金錢の爲めに結婚する人は、漫りに金錢を貴重なるものとし、之に比すれば總て我生涯の満足や、辱なき天福も、到底物の數にも足らぬものと思惟すれども、サテ其金錢と、悲痛とを併せて打算し見れば、必ずや總ての金錢は失ふとも、生涯は賣らざりしものと悔恨するに至るべし  
 結婚に依りて、我真驚なる生涯が、忽ちにして温雅貞淑、瀟洒輕妙の佳人を以て裝點せられ、而して其佳人は我忙しき時には、決して邪魔するとなけれども、我堅たくろしき難業に飽き來れる時には、常に手近かに來り吾れを慰むものと想像する勿れ、斯の如きは幻想のみ、食色の念熾なる少年時の一夢のみ  
 「ゼレミイ、テイロア」曰く「ホーマア」は良人たるべき勉めの性質に多くの、やま



しき名を附加せり、細君に對しては父たり、母たり、又兄弟たるべし、結婚は畢竟、孤子の境涯と相比して優るなきものたり、即ち妻は夫の爲めに、父母兄弟を見捨つべき必要あれば、所詮は其爲め、父なき貧兒の如き悲境に陥る乎、若し之を免れんとせば、父母兄弟よりも優る好遇を、夫より受けざるべからずと

人若し少しにても心に疑ふ所あれば決して結婚する勿れ、結婚は甚しき幸福たり、又甚しき不幸なり

結婚は大責任なり、總じて眼のみに信頼する勿れ、又眼の爲めに過まるゝ勿れ、眼と手とを以て結婚を約し得べきにあらず、須らく道理と心とを以て約すべきなり

良妻は管に形体上の事物に關してのみならず、又實に心事に關しても一大助手なり、「セクスピア」曰く卑劣なる人と雖も戀愛に落つる時は、其天性よりも更に多くの貴き性情を有するに至ると、若し果して卑劣なる人に在りて

も尙ほ心に強き影響を受くると斯の如きものありとせば、既に其天性の高尙なる人に在りては、更に其受くる所の大なるものあるや知るべきのみ  
「ゼレミイ、テイロア」曰く結婚は其成立に於ても、其結合に於ても、其不可思議なる點に於ても、其主意に於ても、其稱呼に於ても、其使用に於ても神聖にして名譽あり、且つ宗教的なり、而して人の社會には利益あり、神に對しては敬心深しと

「タアチュリヤン」紀元二百年代の人、「カアセイヂ」に生れ、羅馬に住む、碩學なり曰く結婚果して幸福なるもの乎、吾等は如何なる言語を以て其幸福を言明するとを得べき、……夫妻共に神を拜し、神に祈り、又共に斷食す、……難を共にし、憂苦を共にし、快樂を共にし、何事も互に包み藏くすとなく、何事も互に苦とするとなし、耶蘇も此状を見れば喜び、必ず之れが爲めに平和を送り、夫妻の在る所には常に彼れ在り、彼れの在る所には惡人在るなかるべしと

汝の妻を娶るや、結婚式の時に於て神聖なる美くしき語を以てす、其語に曰く善き事にも、悪き事にも、富むとも、貧くとも、病むとも、健康なるとも、死して別るゝ迄は互に相愛し、互に相恵むべしと

「スタンレイ」曰く幸福なる結婚は、生涯の新しき紀元にして、實に一身の幸福と、使用方とに對する新しき發端なり、悉く過去の痴愚と、過誤とを抛擲し、新しき希望と、勇氣と、實力とを以て折柄、我眼前に開かれたる將來に向て突進する一大機會なり、夫と婦、父と母、兄弟と姉妹、兒童と双親が水も漏らさず互に相助け合ひ、思ひ々々の方面に向て進行する所の幸福なる家庭は、猶ほ天の如し、即ち外には、何れにか又、斯の如く互に同じき機會を有するものあらん、相互の性質を能く知るものあらん、其の骨は我骨たり、其肉は我肉たり、其幸福と名譽とは、我幸福と名譽となり、其不幸は我不幸となり、其放縱、怯弱、貪慾の爲めには、吾れも亦地に引き下され、其純潔、高尚、實力の爲めには、吾も亦殆んど思はず義務、上天神明に對して身を起すべき程、他人の健康、名譽、神惠

善行に就き共通の利害を有するもの、外に何れにか之れあらんと

尙終りに臨んで言はん、兒童は一大責任たれども其樂しさに於ては、敢て他の諸責任に譲らず、ルベルト曰く一の良母は一百の教師に値ひすと、兒童に就ては時として「下し玉へる」と云へる語を聞く、而して不心得なる両親は、神が口を下し玉ふなれば、之に充たすべき食を下し玉ふべし」と云ひ、以て自ら辨疏すと雖も、是は「マツチエー、アールド」が正しく論ぜし如く、ただ不當の言なり、自ら適當に之を養育し、相應なる手當と、餘り不確實ならざる狀況に

養ふとの出來ざる、惘然なる兒童を此世に出すは、正當にあらず  
兒童を「愛」と云ふ日光の下に成育せしめよ、若し其少時にして慈愛の温情を以て恵まるゝと深ければ、此生の冷寒に耐ゆるとを得べし

可愛き我子との痴話に於て、其可憐なる語調が、如何に人の心を踊らしむるか、其樂みは子を愛する人の外之を云ふ能はざるべし、其子供らしくして舌も廻らぬ話振、其少怒する所、其無邪氣なる所、其不完全なる所、其要むる所、一

として之に交り、之を喜ぶ人の樂みの種ならざるはなし、之に反して其妻や子を愛せざる人は、家に乾獅子を養ひ、又悲みの巢を育つるが如し、神惠夫れ自らにては人を幸福ならしむる能はず、左れば總て其妻を愛すべしと、人に命する神の訓戒は、畢竟其樂みを進むるに就ての必要上と、資格上とより來るものなりと

第十三章 勉強

何ものをも浪費する勿れ、然れども何よりも時を浪費する勿れ、今日の日は一たび去りて復た回らず、實に時は天の最富なる賜の一にして、一たび失へば取戻すとの出來ざるものなり、天も尙ほ過去に對しては力なし、過ぎしは過ぎしなり、吾れは我時を有せしなり

今涙りに時を費やす勿れ、後に至りて必ず之を悔ゆる日あらん、遅かりしと云ふと、左様にありたりしものと云ふと程、悲しき回想あるなし、抑も時

は受托物にして一秒々々、其勘定を要するなり、故に「眠を愛め、食事を愛め、就中、時を愛め」

或る時「ネルソン」の云れけるには、總て我生涯の成功は何事も定め、の時間より十五分早くしたるに因ると

「メルボルン」脚曰く少年は須らく下の如き語の外、他の語を聽くべからず、其語とは即ち、汝は汝自らの途を作るべし、飢ゆると、飢えざるとは一に汝自らの辛苦に屬すと云ふと是なりと、且夫れ勉強は獨り成功の爲めに必要なるのみならず、又徳性上に於て最も健かなる勢力を有す、「ゼレミイ、テイロア」曰く決して怠惰に過ごすべからず、總て汝の時を充たすには嚴重にして必要なる使用方を以てすべし、體胖かにして心用なき時は、慾望は眞に其虚に乗すべければなり、安逸健全にして怠惰なる人は誘導に逢へば必ず其身を潔ふする能はざるべければなり、而して「時」の總ての使用方中に於て、體軀上の勞働最も効多くして悪魔を驅逐するには最大の利ありと

「ケアル」の語を以てすれば、時と地とは、天と無窮」とに對する準備にして、吾等が此世に於て我寸時を作る通りに、神は來世に於て吾等の歳を作るなりと、縦令ひ些事たりと雖も、更に人を幸福ならしめ、更に人を改善せしむるに足るべき業を爲すとは、人類を激ますべき最上の大希望にして、又最高の祈願なり。

曾て聞く「ピエトロ、メリシ」(フロレンス王)或る時「ミツチエル、アンゼロ」(フロレンス)の大彫刻家、千五百六十四年に死すをして、雪を以て肖像を作らしめたりと、寧に是れ貴重なる時を浪費するの甚しきものにして、愚の至りなり、今夫れ「ミツチエル、アンゼロ」の時が世界の爲めに貴重なりしなれば、吾等の時も亦、吾等自らの爲めに貴重なるにはあらざる乎、然るに吾等は常に雪の肖像を作りて之を浪費するのみならず、更に甚しきは泥の偶像を作りて之を浪費し居れり。

羅馬の大哲學者にして政治家たりし「セネカ」曰く吾等は總て時の足らざる

詫つ、然れども實際は如何して、よきやら知らぬ程多くの時を有するなり、吾等は全然、何の爲す事もなく、又我目的に對して何の爲す所もなく、又爲すべき筈の事をも、更に爲す所なく、我生涯を費消し居れり、吾等は常に我歲月の短小なるを歎じながら、却て歲月には限りのなきものゝ如き働き方をなすと。

「時」を節約したる爲め成し得たる事業は驚くべきものなり、「ニイマヤ」(シユダヤ)の大守、紀元前四百年代の人は比耳斯亞王の椅子の後に佇立する間に天帝に對して、幾度か黙禱するの時間を有するを得たりと云ふ。

吾等の「時」は出來得る限り適當に、且つ都合よく之を送るべし、否らざれば最も幸福なる人と雖も、尙且つ多くの物事を爲し得ず、多くの書籍を讀み得ず、多くの著名なるものを見るを得ず、多くの國土を訪ふを得ず、打過ぐるに至るべし。

此生に於ける成功及び幸福の一大原素は、正實、堅固なる働きを爲し得る能

力是なり、シセロ曰く凡そ必要なるは一にも膽氣なり、二にも膽氣なり、三にも膽氣なりと、自信力も亦疑ひもなく必要なりと雖も、夫れよりも必要なるは一にも辛抱、二にも辛抱、三にも辛抱と云ふの更に正當なるに如かず、素より働くとの、此生涯の目的にあらざるは、猶ほ遊ぶとの、同じく此生涯の目的にあらざると別に相違ぶ所なく、要するに双ながら同じ終局に至る手段なり

働くとの、心神の平和上に必要なるは、猶ほ其の身體の健康上に必要なるが如し、即ち無用閑散の一日は、働きての一週日より多く心身を疲らす、無用閑散は我全組織を顛覆すると雖も、執業は之を健康に、且つ順當に保存す、抑も筋肉の働きは身體を健康に保ち、腦の働きは此心を平和ならしむ、健全なる働きに依りて人は心神の休息を得るなり

「少女に與ふるに朝より元氣よく、夜に入りて疲れを覺ゆるが如き眞の業務を以てし、而して之に、其一日の働の爲めに同胞を利し得たると大なりしと

の觀念を起さしめよ、然るに於ては其心中の力なき悲哀は、忽ち快闊、幸福の平和に化し去るべし」

唯何なりともするがよし、鍊丹の術を發見せんとする企にても、又角なる者と同じ面積の丸き者を作らんと試むるとにても、何か結果のある者なり

「ドクトル、ジョンソン」曰く言語は地の娘なり、行爲は天の子なりと、何事にもあれ、汝の爲す事は之を十分に爲し、之に心を注ぐべし、汝の總ての才能を鑛け、之を用るされば必ず之を失はん、ヘセキア、シュエダアの名王、紀元前七百年代の事に就て聞きしとあり、何の業とても彼れの始めし事は精一盃に之を爲し而して繁昌せりと

「非凡の才子なりと稱せられたる人の一代も、世に傳ふる所にては畢竟百難を排して撓まず勉強したる傳記に外ならず、天才の標準とも謂ふべき或る人の云ひけるには、天才は勉強に優るものにあらずと、ジョフヂ、エリフット

（英國の小説家、千八百七十八年に死す）の如き婦人にてても、人の神來に依りて

其小説を書くことと云ふことを冷笑せり、校長「ドイツ」千八百十七年に死す、エ  
 ール大學に於て子弟に告ぐるに「天才は勉強するの力なり」との語を以てせ  
 り  
 乞食するは總じて働くよりも苦しきものにて、打算し來れば餘り引合にな  
 らずと云ふ、且夫れ人は誰にても己れの足を以て立たざるべからず、「フラン  
 クリン」曰く其足に於ける耕夫は、其膝に於ける紳士よりも高しと  
 「ゴベット」千八百三十五年に死す、非常なる苦學を以て名を爲したる人、其著  
 名なる英國文典の事に付き話して曰く予の文典を學びしは、一日六片の賃  
 金にて私兵たりし時のとなり、我臥床や、又は我當番部屋の臥床の端が、我勉  
 強の席となり、我糧囊は我書篋、我膝上に横はる小板は、我書机なりき、而して  
 其業は一ヶ年をも要せざりしなり、予は蠟燭や油を求むる金なく、冬には戌  
 火の外には、別に夕暗を照らす光を得るの途なく、此戌火さるも順番が來ら  
 ざれば之に近くを得ざりき……予が時折、筆紙墨に費せし「ファシク」

二片の四分の一も中々のとにあらざ、實に予が爲めには大金なりき、予は矢  
 張今の通り丈け高く、至りて健康にして、至りて又運動に勉めたり、當時吾等  
 の金にして、買ものゝ爲め費やさるものは一人一週、僅に二片なり、予は殊  
 に能く記憶す、或る時總て必要己むべからざる費用を支出したる後、金曜日  
 には豫備として半片を餘す繰合を付け、此半片を以て翌朝、赤鬮を買ふ積な  
 りし所、夜に入りて衣服を脱ぎ去りし時、殆んど耐え兼ねる程、空腹を感ぜし  
 につき、偶々衣囊を探りしに、ウタテや予はドコにか我半片を遺失したると  
 を發見せり、此に於て哀れなる破れ布團の中に頭を埋め、小兒の如く涕泣せ  
 り、今予が斯の如き有様の下に斯業に耐え、之を仕遂げたりとせん歟、世間、何  
 れの處にか其不成業なるとに對し、陳疏の途を見出し得べき少年あるあら  
 んや、是れ予が再び此に之を言はんと欲する所なりと  
 「ゴベット」は金錢を有せざりしと雖も勇氣と、銳氣とを有せり、「ベイコン」曰く  
 大抵の人は其富も、其力も、双ながら知悉する所なく、富をば實際より豊かに

大なるものと信じ、力をば實際より假かに小なるものと信ぜり、自立と克己とは人に教ゆるに、吾れ自らの盡中より飲み、吾れ自らの旨まき麴を喰ひ、我生活を立つる方法を知得し、之れが爲めに働き、我信托の下に委ねられたる物を注意して使用すべきとを以てすと

東洋の諺に曰く精勤は貯蓄を生ず、逡巡する獅子より働く犬こそ優るなれと  
造化の人に語るには、引合ふと、引合はざるとに拘はらず常に働くべし、唯夫れ努めて働かん乎、其報酬は辭せんと欲するも得べからず、縦令ひ其働は奇麗なるものにもせよ、粗雑なるものにもせよ、穀子を蒔くの業なるにもせよ、詩歌を書くの業なるにもせよ、苟くも正常なる業たる限りは、自ら満足するだけに之を爲すべし、然る時は必ずや其報酬は、感覺と、思想との上に來るべし、幾度失敗するも意とするに足らず、畢竟は之に打勝つべき様に生れ居るなり、都合よく爲し遂げたる事に對する報酬は、之を爲したりと云ふと即ち

是なりと

「サア、ウオタア、スコット」の吾等に告げし如く、大魔術師「ミツチエル、スコット」は其懇意なる悪魔を手に入れ置く法は唯斷えず之に仕事を與ふるに在るとを發見せりと云ふ、此理は總て吾等に對しても同段なり、人の心中より驅逐せられたる悪鬼は、若し其家の空虚なるを見るときは忽ち還り來り、且つ已れよりも更に悪しき他の七悪鬼と共に此に入るなり、事聖書に出づ）  
怠惰は休息にあらず、働くよりも更に甚しく疲るゝものなり、羅馬の諺に曰く何事をも爲し居らざれば休むと出來ずと、寔に若し常に何事をも爲し居らざれば休まんと欲するも豈得べけんや

決して急ぐ勿れ、造化は決して急がぬなり、瑞西の案内者が、若き山行の人に第一に言ひ聞かせ、且つ屢之を繰り回す語は、徐々として足並みよく行くべし、又は、餘り早く歩まんと試むる勿れ、唯遲滞せずして歩むべしと云ふに在り、兎も角も折々は休むべし、強き牡牛にても斯かするを要す、而して先づ五

六町毎に休息せしむるが丁度よき距離なるべし、人の生涯に於ても進歩の一大秘訣は、決して急かす、又決して滞らぬに在り、東國の諺に曰く急ぐは悪魔を喚び來るべしと雖も、辛抱は幸福の門を開くと  
 多くの人は急げば時を節し得べしと考ふる様なれども是れ大なる誤なり  
 早くするは可なりと雖も、早くするよりも善くする方更に肝要なり  
 又事業其ものに就て之を言ふも、勢に乗し急て之を不規則に仕遂ぐるとは急ぎもせず、激昂もせず、徐々として、孜孜として規則正しく仕遂ぐるに比すれば更に力を費すと多し、急ぐは管に事業を敗るのみならず、又實に生命を害ふに至るべし

急がず、又休まずに働けとは、キョテの格言なり、但し我國の休むと云ふ語は彼れの意思を正確に言明し難き點ありと知るべし、其時に曰く

急ぐ勿れ、去りながら無聲の所業を以て、常に此精神の速力を妨げしむる勿れ、熟慮して正しき途を知り、而して後進み以て汝の力を檢すべし、急ぐ

勿れ、歲月は決して不繕りなる行爲に對して償ふ所なかるべし  
 休む勿れ、此生は去りて回るとなし、汝の死する前に進めよ、敢行せよ、雄魂  
 毅魄は後に残りて時に勝つべし、此形體の消え去りて後も、長へに魂魄の  
 存するは名譽ならずして何ぞや

左れば劇く働くべしと雖も、急ぐ勿れ、激昂する勿れ、憂苦する勿れ  
 「フランシス、ガルトン」千八百廿二年に生る、醫士にして篤學、又阿非利加の探  
 險家曰く其旅行の進み振りを見て自ら樂むべし、頸を曳て其終點を望む勿  
 れ、文明に還り來るとを以て行路難の終り、又は安全なる港に入るものと思  
 ふなく、寧ろ殘念なる事なり、冒險的にして愉快なる生涯の終りなりと思ふ  
 べし、斯く思ひ居れば危険少なくて、不知不識の間に汝の進むと共に、其國  
 の關係と、資力とを知るとを得ん、これは急ぎ旅び、又は憂多き旅びにとりて  
 は最も價值あるものなり、是より數ヶ月を經過し、回顧せば坐ろに我旅行せ  
 し道の遠きに驚かん、即ち若し一日に僅か平均三哩を進むとしても一年の



終りには一千哩に達すべし、是豈著るしき探險ならずや、彼の兎と龜との寓言は明らかに、茫々として人迹未到の地に旅行する者の爲めに言はれたるが如しと

早く起き出で、筋肉と脳髓に適當なる運動と休息を興え、食物を慎み、相當の程度に於て睡眠し、物事を苦にせざれば必ず、働きの爲め身を害するとなかるべし、倦怠、激昂、短氣、憂苦は働きの進行せしめざるのみならず、遂には人を殺すに至る、左もなくとも、遂には其身を病魔の犠牲と爲すに至るべし、然れども若し此世を快濶に平和に暮らし、心に與ふるに智能の運動と、思想の自由を以てすると、猶ほ体に與ふるに運動と新鮮なる大氣を以てするが如くせば、性命を延ばしこそすれ、決して縮めるとなし

耐忍は政治家の腦漿、軍人の刀劍、發明家の秘密、書生の解説書なり、抑も我尊き女皇陛下は歴史上に於ける最上なる君主の一たり、何を以て然る乎、疑もなく、陛下は大判断力と術策を有し玉へども、之を要するに陛下の決して玉

體を勞せらるゝを惜み玉はぬと其原因なり、陛下が此御大心を、モンチイグル卿に對する勅の中に顧らはし玉へるとは、セムソン夫人の行狀中に引證せられぬ、曾て卿が或る國事に付、陛下を煩はし奉るに至りしを恐懼して、其趣奏聞しけるに、陛下の勅らせ玉ふには、朕に對しては決して、煩はしと云ふ勿れ、唯如何にせば正當に其事を爲し得べきかを言へ、出來るとなれば朕、之を爲すべしと

左れば此生涯に於ける義務、又は事業は如何なるとにもあれ、出來得るだけ之を善くする様、勉むべし

「ウエリントン」候の勝利は畢竟、其大將軍たるが如くに、其大事務家たりし故に歸せりと謂ふも過言にあらざ、公は其糧食と兵站部の細密なる點に最も注意し、其馬匹には十分なる糧秣あり、其兵士には温かなる服裝と、強固なる靴と、良好なる食物を供給せり

「ソラモン」曰く汝は、かの業務に出精する人を見しか、彼は王の前にも立つと

を得べしと、又セントポールは人に告ぐるに、事業に不活潑なる勿れ、精神は奮勵すべし、而して神に事えよとの語を以てせり

勉強は夫れ自らの報酬を齎らし來るものぞかし、コロンブスは印度に到る西航路を求めんとせし中に亞米利加を發見せり、又ギョテが指駝せし如く「ソール」は父の驢馬を探索せし中に一王國を見付たり

「フランクリン」曰く何事にても爲すべき善の事は、之を仕遂ぐる様に決心し一たび決心したる事は失敗せぬ様に之を仕遂ぐべしと

天才を以て勞苦に代り得べきものと想斷すると往々にして之れあり、大學に在る人にして其初めの間は怠惰に打ち過ぎ、僅か短時日の間、濡れ手拭を頭に載せながら非常に勉強して、高等なる學位を得たると其例乏しからず此等の人の爲めには、必ずや後に其濡れ手拭が高き價に當ると雖も、尙且つ一時勉強したるには相違なきなり、之を學校の記録に徴して判斷するに偉人は多く其成功を擗發なる天性よりも、寧ろ勉強に歸せり、「ウエリントン」

「ナポレオン」「クライブ」「スコット」「セリダ」の如き總て學校に於ては鈍き小供たりしと云ふ

甲は乙より天賦に富むと云ふは疑なきとなれども、今試みに才氣は煥發すれども不注意、怠惰、放縱なる者と、比較的遲鈍なりと雖も勉強し、注意し、而して高尚なる志を有する者と、此生の競争を爲さしめんか、後者は遂に其才華煥然たる競争者に追ひ抜くべし、天才なしと雖も勉て怠らざるものは、結局天才ありて勉めざるものより多く爲すあるべし、先天の利益も、擗發も、富友も、權親も、勉強と品性の缺乏を償ふと能はず

「ランコルン」の僧正にして大政治家たりし「グロセタステ」千二百五十三年に死すに一人の怠惰なる兄弟あり、一日來りて顯職に居かれんとを求めし時、僧正の答へけるには「兄弟よ、若し汝の耒耜にして破損せんか、予は爲めに其修繕料を支拂ふべし、若し又汝の牛にして死すとあらんか、予は爲めに其代りを求むべしと雖も、汝を顯職に居くとは出來難し、既に汝の農夫たるを

見る、恐らくは何時迄も農夫として捨て置くの外なからんと  
「ミルトン」は嘗に天才に富みしのみならず、又實に撓まず勉強せし人なり、乃  
ち自ら其習慣を記述して曰く、冬に於ては屢、勞働や祈禱に人を喚び起す鐘  
の鳴る前に起き、夏に於ては最も早く起き出る鳥に後るゝとなく起き出て  
て奇書を読み、又は注意整ひ、記憶の満る迄、人に之を讀ましめ、然る後、清淨な  
る勞役を以て體軀の健康を養ひ、此心を靈妙輕快ならしめたる上、宗教の爲  
めと、此國の自由の爲めに盡くすと

我仕事を面白からぬ義務と思惟する勿れ、心次第にて之を有興味となし得  
べし、先づ之に我心を投ち、其主意を知悉し、其原因と過去の歴史を追究し、總  
ての關係を考察し、又縱令ひ其仕事は卑下なるものにもせよ、之に依りて如  
何なる恩恵を人に與え得べきかを思へば、殆んど熱心を以て従事するを得  
ざる義務あるなし、既に仕事を愛する様になり、樂て之を爲すに至れば又  
必ず容易く之を爲すとを得べし、若し最初の間、其様に出來難きを見、又姑ら

くの間は、其の單に苦痛に過ぎざるを見ると、追々善く成り來り、猶ほ我品  
性を奮激せしむる山上の空氣の良きが如くなるべし、スカンヂノロピヤ  
ン上代の人は槌を打振る軍神を拜し、又古るきノールヌの神代記中に「ヅテ  
ランド」が世界第一の冶工とならんとを欲し、其魂を惡魔に賣れりとの話あ  
り、然れども是等は寧ろ過ぎたる方なり

幾時間睡眠せば可なるかと云ふは、大問題にして一に之を天性に任さざる  
べからず、甲は乙よりも多くの睡眠を要すべく、所詮、天性が要求する睡眠時  
間を減ずるとは出來難きものと思考す、又睡眠に費やしたる時間は、之を混  
費したるものと謂ふべきにあらず、夫れが爲めに市中に住む人には不足勝  
ちなる氣力の快復は驚くべきものあるなり

サア、イ、コルクス英國の法律家、千二百三十四年に死すが一日の分業は睡眠  
の爲め六時間、法律上の勉強の爲め六時間、所禱の爲め四時間、残りは造化を  
樂むと云ふに在り

「サア、ダブリユ、ジョンズ」英國の法官にして東洋學者、千七百九十四年に死すは之を修正して曰く法律に六時間、睡眠に七時間、世の中の事に十時間、而して總て皆上天の爲めにするなりと  
予が爲めには六時間も、七時間も、未だ足れりと謂ひ難し、吾等は、眼が醒めて復た眠られざる程、神心の新になる迄、眠らざるべからず  
悲哀の時に在りては、我心を轉せしむる業務、屢大に慰みとなる、此生涯の幸福とは、何か爲すべきとあり、何か愛すべきとあり、何か望むべきとあるの謂なり、實に吾等は無事の時に當りて意味もなき恐怖と、必要もなき心配とを以て自ら苦むこと多し、左れば常に世話敷こそ宜しけれ、斯くては「業務」と「思想」の中に於て「悲哀」の與ふる能はざる平和を發見すべし、老「リライ」曰く何れの地も賢人の爲めには其國たり、如何なる部分と雖も、靜心の爲めには宮殿なりと  
造化に従て働くとも之に逆對する勿れ、出來るなれば流に逆りて漕くと勿

れ、然れども若し漕くべき必要あれば進て之を漕ぎ、決して逡巡する勿れ、併し概して造化の向ふ所に任せば、造化は常に吾等の爲めに働くものなり  
一の外形上の法則を破りし人は總てに對して有罪なり、萬物は全然之に向て武器を執り、造化は總て其無數不測の力を以て、其人は云ふ迄もなく、其子孫に對して迄も復讐の準備をなし、而して其人は、その何時、何處より來るか、豫知する能はざるなり、之に反して全心を捧げて造化の法則に従ふ人は萬物皆、己れと共に善を成す爲め働くを見ん、斯の如き人は即ち萬物と平和の境に在るものにして、上は頭上に輝やく太陽よりも、下は脚下に飛ぶ塵埃よりも、共に均しく友とせられ、其助けを得るなり、何となれば斯の如き人は大陽や、塵埃や、總ての物を造り、之に向て破るとの出來ざる法則を與へたる其者の意思に従ひ居ればなり

第十四章 信 仰

統計家の調査に據れば、十五億の人類の中に佛教徒四億、耶蘇教徒三億五千萬、「ヒンドー」二億、回教徒一億五千万ありと云ふ、之に就き「セルデン」英國の碩學、千六百五十四年に死すの「人」は安心立命の爲め同一宗教に在りと謂ふと雖も、若し仔細に吟味せば何れの所に於ても、總ての點に就き同宗教なる人三人とは發見すると難かるべし」と論したるは極端に走る嫌なきにあらずれども、疑もなく最も正鵠に近き論にして、事實斯の如くあるべきは敢て驚くに足らず、即ち人は此現世に就てすら眞に知る所極めて少し、何ぞ來世に就て知るとの多きを期し得べけんや

「クヤノン、リドン」英國近代の學僧、千八百九十年に死す曰く一段高き信仰世界の、我眼前に開かるゝや否は姑らく措き、現に吾等が今日生存する此驚くべき世界は、無數無限の不可思議なる殿堂なり、汝且つ明日の午後、出て、田野に歩すべし、コ、ソ、に膨脹しつゝある新芽、又は嫩葉の緑なるは忽ち汝をして、春の回り來りて年々歳々、勝利に誇る其の美景を、汝の眼前に呈する

ものなるを想はしむべし、汝の周圍には、何れの所に於ても汝が見るとも觸るゝとも、説くとも、計るとも、理解するゝとも出來ざる不可思議なる力の存在動作する證據あらん、此力は言はず、語らず、又見えず、然れとも汝が頭上なる何れの木の芽にも、汝が脚下なる何れの草の尖にも、鋭氣勃々として寄寓するなりと

抑も「疑」は哲學の基礎なり、吾等は今不可思議なる此世界に住み、極めて單簡なる一花をも、極めて些小なる一蟲をも解説する能はず、何ぞ此不可測界を知了するを期し得べけんや、「ミル」曰く人類の存在は不可思議を以て繞らす、吾等の經驗狭き土壤は、限りなき大海の中央に在る一小島の如し、而して此大海は其廣大なると、暗黒なるとの故を以て、曾て吾等の感覺を恐怖せしめ、又吾等の想像を激昂せしめぬ、此不可思議の上に加ふるに、吾等が地上に現在する國土は、嘗に不可測界に於ける一嶋嶼なるのみならず、又不可測時に於ける一嶋嶼なりと

去りながら縦し吾等は常に餘儀なく無識の狀に打ち過ぎ、又我判斷力を停止するとあるとも其爲め我希望を失ふべきにあらず

吾等は説明する能はざるものを感じると多し、是れ唯神學のみに止まらず、シント、アウガステン、タヤンタペアリイの初代大僧正、紀元六百四年に死す、曰く汝若し時とは何ぞやと予に問はんか、予は之を告ぐる能はず、然れども予は汝の問なくも十分能く之を知れりと

「マアチノヲ」曰く餘り神のとを多く話す人、何事に就ても神の御心を知れるが如く云ふ人、萬物の成立する理由に就ては何知らぬと云ふともなく、又萬事に就て慈悲心を顯はさずと云ふとなき人、造化の經濟の巧妙なるを賞讃し、之を老吏獄を斷するの妙案の如く思惟する人、洋々乎、又翻々乎として神明の神聖なる階子に身を投するが如き人、斯の如き人は餘り明白すぎたる保證を以て、却て吾等を疑惑の苦境に導くと

「ダイソ、スタンレイ」は、其終生の大目的は此時世の信と、疑との間に於ける衝

突を破り、ソコより吾等に向て助援の來る、其邱上に視點を定むるに足るべき事を爲すに在りと云へり

「ハアバート、スベンサア」曰く考ふれば考ふる程、益不可思議になりゆく、其不可思議の中に於ても、人は常に萬物進行の基をなす不測不朽なる精力の前に在るものなり、といふ一の純然として確かなる理義の存在するを見るべしと

左れば吾等は縦し之を説明するを得ざるにもせよ、之を感じるだけにて満足せざるべからず

人を多くの宗派に分つ其差異は大抵、宗教上よりも擧る黨派上の關係より來る即ち「セント、ポール」の警告に對して、彼等は「吾れは、ポール」の黨なり、吾れは「アポロ」の黨なり」と言ふに至る

「ゼレミイ、テイロフ」曰く神國は言語の中に存せず、勢力、即ち神々しき勢力の中に存す、縦令ひ吾等は今、他の方法に頼れりと雖も、總ての宗教は皆之を信

仰に轉じ、而して此信仰なるものは、利害又は争論の産出物に外ならざれば取りも直さず、吾れより以外の世界に對して、争ひつゝある一黨派に従ひ居るものなり、即ち若し試に彼は何教なるかと問ふは、是れ全く彼は何れの黨派に屬し、其教派の規則は如何にあるべきかと言ふの謂なりと知るべし、又人にして其黨派と、其利害に對して熱心ならん乎、假令ひ其人は、然らざれば深慾紛争、偏頗高慢の人たりと雖も、尙ほ之を貴重なる人となすなりと

學者は屢、信仰に乏しとて攻撃せらるれども、是は「トカロ」の言ふ所當れり其語に曰く實際は宗教中に於ける學術より、學術中に於ける宗教の方更に多しと

然れども學者の疑を挿むや、敢て輕蔑的精神より出づるにあらず、乃ち之を言語に發するも更に輕蔑的ならず、寧ろ崇敬的なり、彼の「テニソ」が能くも云はれし如く、信仰上に於て感ありと雖も所行は純潔なり、遂には自ら其所を得るに至るなり、吾を信ぜよ、正實なる疑惑の裏には生か半分の崇拜の

裏に於けるよりも、却て多くの信仰の存在するものなり、

例として二人の代表者を擧げん、チンダル博士曰く予は天地間に徘徊する彼の「勢力」に付するに人格、其の他具體的の形式を以てせんとせしかども此の「勢力」は總て感觸的の待遇を嫌ひて逃げ去れり、即ち予は敢て之に對して「彼」と云ふ代名詞を用ゆる能はず、又敢て之を「心」と喚ぶ能はず、尙且つ之を原因とも云ふを嫌へり、寔に其不可思議なるとは、予をして暗然たらしめぬと、

「バクスレイ」博士は熟慮家の一人にして又無神論者なれば通常、宗教上の制度組織には、良友たらざる方なれども、吾等に告ぐるに、常設寺院の存在は社會の爲めに一恩惠たるを認め得べし、即ち寺院に於ては毎週、祈禱を施行すべく、而して此祈禱たるや、單に神學上の提議、拔萃を繰返す爲めにせず、人の心に、其誠實、正義にして純潔なる者たる觀念を與ふることゝすべし、夫れ寺院は日々、處世の重荷に倦み憊れたる人に對し、誰ととも往くを得べき最高なる生涯の考察、假令ひ之に達するものは僅なるもを與え、以て暫時の休息

を圖らしむべき場所、生活と闘ふ人や、實業に忙しき人をして、其慾望する報酬を以て、之を平和と慈善に比すれば、如何に些少なるかを考へしむる時を與ふる場所なり、若し果して斯の如き寺院にして存在せん乎、誰か敢て其設立を求めざるものあらんや、是れ予の確信する所なり、との語を以てせり、是れ「アーノルド」「モリス」「キングスレイ」「スタンレイ」及び「ジョウエット」の寺院と相距ると遠からざるが如し、英國の寺院も追々此理想に近づかんとし、其進むに従て寺院は益強固ならんとす

神學者は自ら、理解し易き言語を以て其深秘を言説せんとに勉む、吾等直に之を文字通りに解せんとせば、彼等に氣の毒なり、今若し詩人が「昇る日」と歌ふとありとも、之を天文學に通せざる者として責むるに及ばず、又「セクスピア」や「テニソン」が、動くは地にあらず、天なりとの説を包藏すと雖も、之を蕪神者として責むると其當を得ず、見よ或る學術上の發明に就ても自ら夫れに特殊なる言語を要す、吾等は新造の言語を用ゆるとなくして一花一石をも

説明する能はず、然るを況んや此人類の言語を以て、無盡の造物を了解せんとするに於てをや、其不可能は確かに心に感ずる所なり、左れば昔の記者が其時の通説に従ひ、今日吾等が神系病の作用たるを知る、人の舉動を認め、て悪魔の所爲に歸せしめしめし、敢て驚くに足らず

自ら説明するとも、亦了解するとも出來ざる、物事を信ずると公言するも何の甲斐もなし、又確かなる證據を有せざる事實を信ずると言ふも、將た自ら了解すると能はざる物事を信ずる様、勉め居れりと言ふも、何の甲斐もなし、即ち好證據のなきとを知り居る事物は、之を信ぜんとするも到底信ずべからざるなり、之に反して十分なる證據ある事を信じ、證據なしと見るものは、其判断を中止すると吾等の務たり、世には或る記録に對して、信を措くか、否らざれば信を措かざるか、兩者何れかに決せざるべからずと思ふ人多きが如くなれども、其實、信ずるとも、信ぜざるとも、何れに對しても十分なる理由を有せざる場合常に少とせず



眞成の信仰は單なる感能の動作にあらず、吾等が載く信仰は生きたる信仰なり、信仰にして働きなき者は、即ち死したる信仰なり、セルデンは、信仰と働きたるを、光と熱とに比せり、彼れ曰く、縦令ひ我感能上に於て此の兩者を分ち得ると、宛も蠟燭に對し、光も熱も共に存在するを知り得るが如くなるも、然れども之を吹き消さんか、兩者とも忽ち消滅するなりと、堂々たる聖書の「ヘブライユ」の第十一章に於ては、信仰は之を行爲に歸すとせり、即ち信仰に依りて「アベル」は其犠牲を捧げたり、信仰に依りて「ノア」は其船を作れり、信仰に依りて「アブラハム」は其家を去れり、人は離れとて、自ら信ぜしこと、自ら爲せしとに就き十分なる理由ありと思ひ居らざるものなし、何事にもあれ苦痛と勞役を要する勤業に出會し、敢て之を避くるとなく、自ら信じて正道となす所を忠實に遂行すれば、其人は之れが爲めに賞讃を蒙るべし、然れども苟くも證據の辻褄合はぬと見れば、忽ち我判断を中止すると吾等の一義務にして容易ならざるとなり、場合に依りては疑惑は假令ひ徳性の如くなら

ざるも確に一義務たるとあり  
 覆面はそろ／＼と取除けられんとす、去りながら無數の問題に就ては、差當り吾等は未だ無智識を以て満足せざるべからず  
 「人類としての吾等の幸福は、縦令ひ主として吾等に關する事物たりとも、唯其一部分を知るを以て足れりとするに在り、……吾等が快樂と勇進の力とは畢竟、吾等が雲霧の中に呼吸し、其コ、に開かれ、カシコに閉ざれつゝあるを見て満足し、最輕最薄の皮膚を通して、具体の事物の形狀を端倪して樂むとを得る上に屬す、縦令ひ隠れたる所に於てなりとも折々尊きとを認め、又光輝に被覆なからしむれば却て吾等を燒き、萬物を除り清徹ならしむれば却て吾等を倦ましむべきに、夫には之を包み玉へる深切なる覆面の在るを見て、之を樂む上に屬す、天機の漏れざるは神の恵みなりと言ふ意  
 何となれば、ハクスレイ博士が云ひし如く、誰にても予が之を耶蘇教の光輝ある一面と言はんと欲する所、即ち其力と、其耐忍と、其正義と、其人類の弱

點に對する慈悲と、其極端なる克己に對する助援と、彼の使徒が之を劃示し、彼の殉宗教者の一半が之に其不屈の信仰を安んじ、又之に依りて、「シエナ」の「カサリン」と「ジョン・ノックス」の如き卑賤なる男女が、法王と王とを非難したる勇氣を得たりし、其道徳上の純潔と、高尚とを有する人たる理想——を心に藏むる人は恐らく耶蘇教の信仰を以て、人類の歴史に於ける要用なる原素たりとするを否認せざるべし

「セント、マアク」の吾等に告げたるには、昔し教法師が耶蘇の許に來り、最大なる訓誡は何事なるかと尋ねしとき、彼の答けるには、其第一の訓誡とは、聽けよ、「イスラエル」よ、我神は唯一なり、汝は總て汝の心を以て、總て汝の精神を以て、總て汝の意を以て、總て汝の力を以て、此神を愛せよ、是れ即ち第一訓誡なり、第二訓誡も之に似たり、即ち汝は汝自らの如くに汝の隣人を愛せよと云ふに在り、寔に是より大なる他の訓誡あるなしと、此に於て教法師の彼に云ひけるには、主よ、汝は實のと言へり、神は一なり、彼の外に何の神かあらん

總ての心を以て、總ての理解力を以て、總ての精神を以て、總ての力を以て、彼を愛し而して彼れ自らの如く隣人を愛するとは、備えものと、犠牲を焼くに勝ると萬々なりと、耶蘇は其答の正鵠を得たるを見て、告げて曰く、汝は神の王國を距ると遠らざるものなりと

### 第十五章 希望

希望を信仰并に慈善と共に、徳性の一に齒せしむるは失當なりと云ふもの少なからず、蓋し信仰は理解せらるゝとあり、又せられざるとありと雖も、慈善に至りては其徳性たると明白なり、然らば希望は何故に徳性たらざる乎、失望するは確に悪しき事たり、果して失望が悪しき事たれば、希望は正しき事たり、或る目的を固守し、夫れが爲め辛抱する其中には自ら希望を含有す、辛抱は品性の上に於ける好經驗にして、一時英雄的の所行、縦し高尚なる事にもせよ、に優さると遠し、神心にして痛苦する多くの婦女こそ、寧ろ眞成な

る殉教者たれ

物事を餘り多く心に繋る勿れ、誰にもあれ自ら勇氣を落さざる限りは、眞に打撃を受けたるものにあらず、出來事によりて破らるゝも、夫れが爲め少しも價値を損すべきにあらず、衆寡敵せずして破らるゝも、又之れが爲めに人を一段悪からしむるものならず、去りながら尾を垂れて走り去り、或は打たれもせぬに軍を棄、又は攻撃に會ふて降參するは、是れ人の運命にあらず、唯其過失なり

「シドニキ、スミス」は、其天性たる滑稽的の常識を以て巧妙極まる助言を與えて曰く、若し吾等にして世界的の事業を爲さんと欲せば、水が冷かなりとか、危険なりとか考へ、戦慄しながら岸上に立ち留まるべからず、唯飛び込みて出來得る限り探り求むべしと、凡そ人は眞の危険を恐るゝと、少くなく、却て多く想像上より來る危険を恐るゝと、甚しきは奇なり、一例を擧ぐれば人に笑はれんとを大に恐るゝが如きは是なり

生 一 の 人

生 一 の 人

決して虚偽の耻辱に届する勿れ、「ピオター」は大膽に「フェリシイヌ」耶蘇時代に於ける貴族の如き最上階級の民種と其兵士とに向ひしと雖も、主僧の室内に於ける僕婢の譏に面するを得ざりき、怯者は實に死する前に既に幾度も死す、勇者は決して一度より死を味はず

「ドン、クイゾツテ」の概窓より眩を懸けて、ブラ下るや、自ら以謂らく身は深淵の上に在りと、然るに「マリトルンス」の來りて之を引下すや、實に地を去ると僅に數寸の上に在りしとを知れり

「巡禮進行中」にある「ミストラスト」と「タイモラス」を震懾せしめし其獅子は「クリステヤン」が大膽にも近よりて見れば鎖を以て繋がれ居たり

戰場に於て勝ち誇りし軍勢にして、夜間の恐慌の爲めに北け去りしもの如、何に多きぞや、元來、恐慌なる言語は、原因なき恐怖と云ふとを意味するなり而して、天日赫々たる時に在りても、尙ほ屢、根柢なき恐怖と、心配の起り來るとなきにあらず、「クラマク」の詩に曰く

若し吾等にして之を復習するとなく、又之を深切に育成するとなく、又心中に於て之れに永久の住處を與ふるとなければ、忽ちにして泡となりて消え去り、三途の河の水となるべき心配こそ世に多けれ  
 若し吾等にして之に翼を與ふるを惜まされば、明日は失せ去るべき悲みこそ世に多けれ、原と此悲みは愁然として闖入し來り、靜に篋りて總て恐るべきものを解化するなり  
 不満足なる人は、出來るとなれば、誰れかと替りたしと思ふべしと雖も、夫にしても、彼は甲の健康を取り、乙の財産を取り、丙の家庭を取ると云ふ譯には、ゆき難く、眞に不満足なれば、我總てを以て人の總てに替ゆるか、否らされ總て替へざるかの二あるのみ

「コレリツヂ」英國の文學者、千八百三十四年に死す、其大困難の時に「サア、ハン  
 フライ、ダヅキ」化學者、千八百廿九年に死すに書して言ひけるには、「總て斯の如き變化と、屈辱と、恐怖との間に於ても、造化無盡の感覺は尙ほ我心中を去

らす、我耐え得る處は神恩を以て充滿するといふ、我快濶なる信仰を、不屈不撓の狀に保てりと

左れば決して希望を抛棄すべからず、失望に陥らざる限りは何事にてても回復せざるものあらじ、「憐むべきは落膽の人なりけり」と、「シラアチ」の子は言へり

「ギョテ」は歌あり「勇氣滅せんか、何事も皆滅すべし、左あらんには此世に生まれ出ぬこそ優さるなれ」と、「カムベル」は言へり「耐忍するとは我運命に打勝つとなり」と、「クウバア」は歌あり「自暴に陥るる勿れ、暗黒極まる日も明日迄、生き延ぶれば過ぎ去るべし」と

雖しも過を犯す、過を犯かさゝる人は何事をも爲さゝる人なりとは、能くも言はれたり、然りと雖も同じ過を再びする要なし、宜しく過を以て科程となし、之を以て最上の生涯に進み行くべき踏み石となすべし

「ラヨセフ、ヒユーム」英國の政治哲學家、千八百五十五年に死すは常に、一年十

二五二  
 万磅の財産よりも寧ろ快潤なる心持を有する方優れりと「言へり」  
 行爲に就ては「現在」を最も重要なりとすれども、感覺中には過去と未來に涉  
 る方、優れるものあり、此生の悲境は多く、現在の爲めに未來を犠となすに歸  
 す、即ち目前の満足の爲め來る年の幸福を犠となすに因る、疑ひもなく手中  
 の一鳥は林中の二鳥に優るべしと雖も、是れは林中の鳥が必ず籠中に來る  
 べしと期し難きものあるが故のみ、之に反して吾等の未來は必ず來るべき  
 ものなり、此に於て乎、快樂は回想に在り、大望は上天に在り」とする人こそ最  
 も幸福なるべけれ

果して未來にも生あるものならしむれば、人は蓋し非常なる惡事を爲さず  
 して已むならん、人は須らく眞成なる生涯には關係なき「過渡」や「穢土」共に現  
 世を云ふを拋棄して顧みざるとすへし、然るときは「未來永々」は總ての恩  
 恵を以て直に下り來りて彼と共に住むべし」  
 予は何事よりも先づ將さに言はんとす、男は男らしく、而して爲すべき意思

と敢行すべき心魂を有せざるべからずと、何となれば吾等の疑惑は吾等の  
 逆臣にして、吾等をして企圖經營するを恐れ、之れが爲め履得べかりし善事  
 を失はしむべければなり

勇氣は常に徳性の一たるのみならず、男たるものに缺くべからざる品性の  
 一部たり、苟くも男にして男たらんとせば、勇氣なかるべからざると猶ほ女  
 にして女たらんとせば、柔和ならざるべからざるが如し、尤も男も勇氣と共に  
 柔和なるべく、女も亦、柔和と共に勇氣あるべきと勿論なり

無謀は勇氣にあらず、勇氣は危きを輕んずるの謂にあらず、唯大膽に之に向  
 ふに在り、無益の危険を冒すと素より之を勇氣と謂ふべきにあらず、唯夫れ  
 危険の迫り來る時は、誰しも忽ち憶病心の之に加はるものなれば、其場合に  
 深沈勇膽を以て之に當るを安全なる正道とす、戦に當りて敵より遁れんと  
 すると、正さに是れ敵に殺さるゝ所以なり、殊に「アチルス」(「アキレス」の詩中にあ  
 る「ミルシドニス」の王にして「パリス」の爲めに矢を以て踵を射らる)の如き僅

に踵に傷づきたる者に在りて然りとす

「バアシ」曰く何事にても最も恐ろしからしめんとするには、總じて「晦暗を必要とするが如し、危険の程度を十分に知了し、眼之を見るに慣るゝときは恐懼心の大部は消滅すと、古き諺に、鹿が羽毛に驚かされて獵夫の手に落ち、又軍隊が羊群の揚ぐる塵埃を敵と見誤り伏に陥たる話あり  
心は冷かなるべし、氣は勇ましかるべし、棘刺、即ち危険に觸れざる様、花、即ち安全を攫取すべし、心冷靜なれば危険に會ふとなしとの意なり、又東方の諺に之れあり、安全の裾に包みて満足の足を曳くべし」と  
餘り多くを期する勿れ、「キョテ」曰く如何に少しを期すべきかを知りて、多く樂むと成功の秘訣なりと  
餘り多くを期する勿れ、又餘り速かに期する勿れ、何事も待つとを知るものゝ上に來る、此生に於ける最も暗き影は、人の己れの光りに對して立ち、自ら作る者は是なりとは至言なり、然れども何事にもあれ、思ふ所を爲すべし、悲み

索より來るべし、之を大膽に耐忍すると吾等の上に屬す

「リツター」曰く汝が最も陰鬱なる時に當りては、宜しく最も愉快なる記憶を喚起すべしと、事物は如何に靈妙なるかを知れ、苦めば遂には強くなるべし、尙又吾等は常に心中に懋む所あり曰く何事なりとも來れかし、暴れ荒みたる日の中にも時は過ぎゆくなりと、又「ジョーヂ、マクドナルド」蘇國の詩人千八百廿四年に生る、歌ふて曰く此心、誠にして此愛、強からん乎、事物は決して悪くなりゆくものにわらず、霧がかゝるとも、雨が滴るゝとも、愛は再び之を晴日に變ずべしと、冬の後には夏來り、夜の後には晝回り、大荒れの後には上天氣の來るものなれば、我行く先きの、ドレ程、暗く見ゆるとも、時日は最大なる悲をも掃ひ去るとを記憶せよ、終夜愛心に耐ゆべし、明朝樂事來らん、  
「ソングエロ」の歌に曰く

靜かなれよ、愛心よ、詫つまじけれ、雲の背にも日は尙ほ耀き居れり、汝が運命は誰れにも同じ運命なり、誰の身にも雨は降るぞかし、日の中には暗ら

く鬱陶敷日もあるぞかし

始めには不運の如く見ゆる一變化の生ずるとあらん乎、蓋し其爲め多少の面倒は免るべからず、然れども皮相は屢人を過らしむ、吾等は些少の事に依りて落膽すべき世界に住むものならず、又吾等は何事を爲し得べき歟、之を試むる迄は知るとを得ず、困難と悲痛とは服を變じて屢相友とする者なり、「ネルソン」は退軍の信號を見るを欲せず、其惡しき眼すらも之を都合よき方に轉ぜり、「サア、エム、グラント、ダツフ」千八百八十六年迄「マドラス」の太守たりき、其面白き「レナン」傳中に言て曰く、其生きたる時には吾等の更に注意せざりし人にして、其死に對し吾等の羨む人ありと、又歴史の上には、王冠全様斷頭臺に依りて不朽に傳はる人多し、若し吾等にして苦むなれば、是れは吾等自らの過失の爲めか、否らざれば社會の善事の爲めなるべし、賢者は坐して其損失を悲むとなく、快潤に之れが善後の手段を求む

吾等は此生涯に於ける無数の幸福を感謝し、且つ十分之を樂むを得べきと

同時に、悲みと、苦みとを純然たる害惡と認むるを得ず、誰にもあれ始終變りなき成功を以て無上の喜となし得べきにあらず、若し事に浮沈なければ自ら銳氣の沮喪するを免れず、困難に打ち克ち、誘惑に抵抗し、悲痛を大膽に辛抱するは即ち品性を高め、強め、尊からしむる所以なり

「造物者に面を向け、之に對して憶する所なく歩みゆくとは至大の壯舉なり」吾等は夏の曷々たる大氣と、煌々たる日光とを十分に樂み得べしと雖も、造化は多く其壯と美とを、冬の雪と風とに歸す

「キングスレイ」英國の文學者、千八百七十五年に死す、其短篇を以て北東風を讚して曰く

香しき南風をして我卿々の腰を吹かしめよ、其間に怠けたる伊達男は貴女の眸裏に温められん、心と筆とを柔ぐるの外、彼れ將た何の爲す所ぞ、堅忍なる英國人を育成したるは、劇げしき灰色の天候なりけり

去りながら飛雪紛々たる黒き北東風は、我堅忍不拔の英國人を此世界中

の海上に驅逐す來れ、且つ吾等を強からしめよ、「ヴァイキング」昔時の北方の海賊の血を激せしめよ、「脳と筋とを引締めて吹よ、汝神の風よ、」

困難は道徳上の北東風なり、之に依りて吾等を強からしめ、且つ引締むるなり

「エピクテタス」羅馬の哲學者、紀元前五十年に生る、曰く若し「ハアキユールス」「クワイニス」の大勇者が之を驅逐し、之を清掃せし彼の獅子や、九頭龍や、鹿や、豕や、又は不義無道の獸漢の在るなかりせば、彼は如何にせしやと考ふるか、即ち若し此種のものゝ存在するなかりせば、彼は何事を爲し居りしか、言ふ迄もなく布團に包まれて眠るの外なからん、果して斯の如き安逸なる境に此生を夢過せん乎、第一彼は「ハアキユールス」たるを得ず、「ハアキユールス」たりしとも、斯の如き時期到來して彼を起すにあらざれば、如何に其身を用するを得べき、其精力を如何せん、其身體各部の力を如何せん、其耐忍と高尚なる精神を如何せん

「ソクラテス」が宣告を受けし時、「アポロドラス」は其罪なくして苦むとを痛く悲めり、然るに其時、此大哲學者の言ふには、サテは汝は予の有罪たるを欲するもの乎」と

「セント、ピイター」曰く、人若し受くべからざる苦難を受け、神を敬ひて之を忍ばば、是れ甚だ賞讃すべきとなり、若し汝にして己れが過失の爲めに打擲せられ、之を耐え忍ぶとも、是れ將た何の賞讃すべきとか、是れあらん、然れども、若し汝善をなし、而して之れが爲めに苦みを受けながら、之に耐ゆるは、是れ神の納受する所なりと

第十六章 慈 善

吾等は己れの欲する所を、人に施すべきのみならず、己れの人より盡くされんことを希ふが如くに、人に向て深切ならざるべからず、吾れ若し人の爲め參酌するなからん乎、焉んぞ人の吾が爲め參酌するを期すべけんや、要する



に善き方に人を解釋するときは、大抵は誤なきを見るべし。  
 「或る人は、ハンニバルがアルプスを越ゆる時の如く、酔を注ぎて(當時ハンニバル)巖石の路を塞ぐを見て、其上に火を焚かしめ、然る後之に注ぐに酔を以てし、巖石を柔かならしめたる後、碎き去れりと云ふ」以て此生の困難を通り抜けんと思考す」

或る人は又犠牲を供する覺悟を爲し居れり、去りながら彼等は、此生の光輝と幸福との上に加ふる所多加るべき深切と愛情に基く小事を怠る。縦令ひ吾等が苦情を言ふべき理由を有するにしても、實際夫より來る害は想像せしほど甚しきと稀れなり、乃ち害に對して怒るは偶々之を甚しからしむるのみ、見よ復讐は初め受けたる害、そのものよりも却て吾等に多くの害を與ふるにあらずや、凡そ人を害せんと企つるものにして、同時に其自身に最大なる害を受くるとなきものなし、譬へば猶ほ蜂の怒りて螫すときは遂に身を殺すに至るが如し

鷲鳥は腐肉の外、他の物を臭くとなく、鼯は生前死後にも尚ほ囁むと聞く。過失を發見せんと欲して此世界を歴遊する人あり、然れども批評するよりも賞讃する方、餘かに賢し、又諷刺は眞成の批評と謂ふべきにあらず、縦し器皿棚に骸骨の在るを見るとも恐らく、ソコに在るは夫れのみならず、人に多少の缺點ありとするも、缺點のみならず、他に多く善き所もあるものなりとの意義なり、其の骨は人を作るものにあらず、批評は眞なりとするも、果して之を完全なる眞理と謂ふを得べきか、樂屋のぞきは面白きに相違なしと雖も、コ、は劇を観る最上の場所にあらざ、人に於ても、生涯に於ても善きとは探り、悪しきとは探る勿れ、然るときは遂に我探ぐるものを見るを得ん

いつも堪忍するがよし、小兒のムツカルは十中の九迄は苦む所ある故なり、男も女も此點や、其他の事に就ても、畢竟は大きくなりたる小兒に外ならず、若し吾等にして吾れを犯す人の事情を知悉し、又其所感を推知するを得は、之

を怒るよりも寧ろ之を悲むべき場合多かるべし。誰れにもあれ其病氣なるとを知れば、之に對しては自ら何事も堪忍する様になるなり、先づ何事にも苦情を唱ふるとなく、又何事にもあれ思付たるとをば爲し遣はし、其無理も、憤怒も皆之を恕するにあらずや、唯夫れ何故此時ばかり然るか、始終人に對して斯の如くに深切に、且つ注意を加ふるなれば如何ばかりか宜しかるべき。

吾等は人の心配する氣掛りや、悲みの程度や、秘密の苦みを知る能はず、左れば縱令ひ之に對して不平を唱ふべき理由ありとも宜しく參酌すべし、決して參酌し過ぎるとの懸念は無用なり、何事にも、何人にも我最上を盡くすべし。

「死者のとは深切に語るべし、否らざれば何事をも語る勿れ」とは好格言なり、然れども是は死者に限りたるとにあらず、人の事を深切に言ふものと、人の善事を傳ふるものは、極めて少なきに反して其宜しからざる話を傳ふ、面白

からざる解説を爲すもの何ぞ多きや、若し人にして死者を語るが如く、生者をも語るなれば如何ばかりか宜しかるべき。

左れば急ちて他人を難んずる勿れ、一切難せざれば尙ほ可なり、判断する勿れ、彼が腦と心との働きは汝の見るを得ざる所、汝が朦々たる目に一大汚點と見ゆるものも、神の明煌々たる光に照せば唯、一點の痕痕のみ、而して此痕や、汝なれば忽ち喪心して降參せしならんと思はるゝ、大勝利の戰場に於て得たるものなるやも知れず。

場合に依りては否認の意を顯はすべき必要ある時なきにあらず、然れども總じて深切、慈善の心を以て言ふとの出來ぬ場合には、寧ろ何事をも言はぬが優れり、是れ原則なり、シドニイ、スミツス、其不在中、己れを譏りし或る知り合ひに書を送りて、我居らぬ時には縱令ひ吾れを蹴ると云ふも甘んじて之を受けんと申遣せりと云ふ、併し大抵の人は寧ろ眼前に我過失を擧げらるゝ方を快とし、自ら其所に居らず、辯護する途なき場合に彼是言はるゝとを

殊に心悪く思ふなり、人は他人の悪評を聞て笑ひ且つ喜ぶ、然れども知らずや、其中には必ず己れの順番の回くり來り、其時は今吾れと共に人を笑ふ其人達も更に我爲めに容赦する所なかるべきを、詩に曰く

汝の弟兄を穩かに評せよ、更に穩かに汝の姉妹を評せよ、縦令ひ彼等に多少の瑕玼ありとも之を避けて言はぬが人情なり

左れば判断の場合に當りては沈黙せよ、吾等は決して之を決定し得べきにあらず、即ち既に行ふたる事は多少數ふるを得べきも、其抵抗拒斥したるものに至りては素より之を知るに由なきなり

予は動物の爲め一言を挿まざるべからず、釣や、係蹄や、網や、犬(現今にては銃をも之に加ふべし)を以て、吾等は總ての生あるものと戦ひ居れりとは、セネカ能くも言れたり、吾等が生存の必要上、或る程度迄、他の動物を費消せざるべからざるは隠れなきことなれば、吾等の之に負ふと少なからず故に、宜しく之に不必要の苦を加ふるとを避くべき等なり、感覺を有する下等動物の

悲みを以て、吾等の快樂と驕慢の資に供すると勿れ」

又「若し汝の心にして正しからん乎、何れの動物も汝の爲めには生涯の鏡たり、神聖なる教義の書籍たるべし」

如今吾等は大抵動物の心魂を有するとを信せずと雖も、恐らく釋迦より「ウエスレイ」及び「キングスレイ」に至る迄、過半数の人は曾て之を信ぜり

禽鳥は何となく超凡なり「セント、フランシス」曰く吾れ自らの神聖なる動物たるは言ふ迄もなし、禽鳥も亦、吾れと同じく死滅すべき肉を以て包まれたる神聖なる動物たるなからんや、天使の天に於けるが如くに林中に於て神を敬する(彼は古説に依りて斯の如く想像す)此美麗にして驚くべき動物を愛すればとて、敢て人性の品格を下ぐるものにあらずと

夫は兎もあれ、凡そ動物を遇するに深切と、注意とを以てすべきとは、確として動かすべからず、之に不必要なる苦痛を蒙らしむるは罪惡なり

「ワーズワース」呼びて曰く善人の生涯に於ける最上なる部分は、其些細に

して、名義もなく、記憶もせられ居らざる深切と愛情との行爲、是なりと  
又「コレリツヂ」歌ふて曰く人なり、鳥なり、獸なり其何れをも愛する人こそ善  
く神に仕ふる人なれ、大なり、小なり總ての事を愛する人こそ善く神に仕  
ふる人なれ、吾等を受する貴き神は總てのものを作り且つ之を愛すればなり  
と

「セツクヌヒヤ」の瑰麗なる章句の中に於て其雄大、他に類ひ稀れなりと思は  
るゝものゝ一に曰く

慈悲の分量には限りなし、滴ると地上を濕ふす膏雨の如し、其恵みや重  
れり、與ふる人も受くる人も共に之に浴すべし、即ち是れ無上無限の善根  
にして、在位の帝王をして其寶冠よりも之を貴からしむ、そも帝王の位は  
威嚴の代表にして、暫時の勢力を示すに過ぎず、シカモ其中には恐怖の念  
の絶ゆる能はず、慈悲は帝王の位の勢力にも優さり、其心の中に於て即位  
するものにて、即ち神體の一部なり、左れば慈悲の正道に副ふに當りてや

其地上に於ける勢力は、さながら神の如くなるべし

慈善を以て屢施行と全一視するとあり、是れ疑もなく眞實なり、有名なる希  
臘の詩句に曰く外人も、貧人も、總て人類なり、乃ち施行は如何に少なしと雖  
も香ばしきものぞかしと、然れども施行は唯、慈善の一種にして、敢て之を其  
主要なるものと謂ふを得ず、而して又其方法にして正しからざれば、善根よ  
りも寧ろ害となると屢之れあり

全情と愛憐の感情こそ更に重要なれ、「ポーラ」歌て曰く

人の悲を分ち、我見たる過失を隠くす様に、吾れを教ふるよ、己れが人に顯ら  
はす慈悲は即ち是れ人の己れに顯らす慈悲なり

受けたる害は忘るべし、受けたる深切は決して忘るべからず、恩知らずの子  
は毒蛇の牙よりも鋭るとし

「天日に耻づる人、如何に多きぞや、シカモ大陽は依然として登り居れり、  
人を寛恕せざる人は、人の己れを寛恕せんとを期すべからず

「且つ想へ、身の臨終の際に在ることを、赤裸にして一點身を蔽ふものもなく、今しも汝が同胞に對して爲せし所行を地上の大法官の前に陳述せんが爲め往きつゝあるとを、其裁判に就て、汝が曾て自ら無情なりしと、汝が己れを害せしものに對して慈悲心なかりしと、換言すれば、人に對して寛恕の心、此心は今や廻り來りて汝が、人の己れに對して施されんとを、唯一の望となすものなかりし其回想よりも、更に恐るべき念慮の生じ來るべきとなかるべし、斯の如き自然の念慮は正に是れ我救世主の適用せし至言に照らすべき所なり、其言に曰く若し汝にして、汝の心より同胞に對し其罪を恕せざりしなれば在天の父は又同様に汝を處すべしと  
受けたる害を恕し、敵を愛すべしと云ふ説法は、縦令ひ他の方面に於て一切道徳上の組織を缺く場合に於ても、尙且つ之れだけにて耶蘇の教義たるに負かす、聖教中には屢之を促せり、セント、マツチュウ曰く汝若し人の罪を恕せば在天の父も亦汝を恕すべし、然れども汝若し人の罪を恕せざれば在天

の父も、汝の罪を恕することなかるべしと  
否、恕するのみにては足れりと謂ふべからず、更に一層を進めざるべからず  
「然れども吾れは汝に告げん、汝の敵を愛し、汝を阻ふものを祝し、汝を惡むものを善視し、虐遇迫害する者の爲めに神に祈れよ、斯の如くするは天に在ます父の子とならん爲めなり、天に在ます父は惡人の上にも、善者の上にも大陽を照らしめ、正人の上にも、不正者の上にも同じく雨を降らしむるなり」  
「セント、ポール曰く慈善は永續して深切なり、慈善は媚嫉する所なし、慈善は自ら誇る所なく、又濫に誇張する所なし、而して其行や公明にして、敢て自ら需むる所なく、容易に激昂せらるゝとなく、絶えて惡事に思ひ及ぼすことなく物の公平ならざるを喜はずして、眞理を喜び、何事をも負擔し、何事をも信じ、何事をも望み、何事をも辛抱するなりと  
「慈善は決して失敗するとなし、唯豫言する所あらん乎、失敗すべし、饒舌ならん乎、止むべし、知識あらん乎、消滅すべし、………信仰、希望、慈善、此三者に安ん

### 第十七章 品性

單に立身の問題より見れば、品性と堅忍とは、敏慧よりも人のために多く爲す所あるべし、但し予は品性の重要なるを、主として斯くの如き點に置かんとするにあらざれども、是亦、其眞實たるを失はず、凡そ正義を行ふは正義を知るよりも重要なり、苟くも吾等にして善人となり、幸福者となり、又繁昌せんと欲するなれば、齊しく此經過を追はざるべからず、夫れ黄金的の所行は黄金的の日を作るに在り、生涯の價値は其道德上の價を以て計算すべきものなり、良心が汝に告ぐるに、其爲すべき事なるを以てし、而して汝若し罪却不滅の人類が、正當に希望するだけの恩恵を施すべき手段を有し、一たび心を決したる以上は決して踏阻躊躇して立つなかれ」

義勉を怠り、又は之を避けて以て到底幸福を増し得べきものにあらざ、賢者と善人の性行は、義勉の屬する所は、敢て男らしからざる恐怖を懐くとなく、勇往直進、百千の危難をも辭せず、神に信じて、總て之に打勝つに在り、此生涯に於ける眞の成功に必要なは、果して何物なる乎、唯一事の必要なるあり、金錢も必要ならず、勢力も必要ならず、敏慧も必要ならず、名譽も必要ならず、自由も必要ならず、健康すらも必要にあらざ、獨り品性、即ち十分に鍊磨せられたる意思こそ眞に吾等を救済するものなれ、若し夫れ人にして此點に於て救済せらるゝ所なからん乎、必ずや落ちて地獄に陥らざるべからず

品性は自ら擇びて之を作るとを得るものたり、吾等は素より誰にても詩人たり、音楽家たり、大美術家たり、大學者たるを得ずと雖も、他の事にして吾れは其性を稟受せずと云ふ能はざるもの多し、今試に此等の性格を擧げんか、何れも皆我力の及ぶべきものゝみなり、曰く深切、重厚、勞力の忍耐、驕奢を忌

むと、恩恵心、淡泊、足るを知ると、些事に無頓着なると、雄大なる心、是なり、見るべし、斯の如く天性之に適せずと云ふ遁辭を許さず、直に顯はし得べき性格の甚だ多きにも係らず、人の自ら好みて之を通常點以下に抛棄し居るとを……唯夫れ若し真に其了解力にして、運鈍ならん乎、宜しく之を勉め、之を怠らす、自ら其運鈍を利するが如きとなかるべき筈なり

何にもあれ、耻づべき原因を有する事を爲す勿れ、此に最も大なる必要を有する一頁説あり、自説是なり、「セネカ」曰く、安き心は斷ゆるとなき獲難の如しと  
「フランソワリン」には、吾等多く其助言に負ふ所あり、然れども其採用せし一工夫は予之を推奨する能はず、諸徳性に就き、明劃なる摘要を付して、其後に氏の言へるには、予は總て此等の習慣を得んと欲せり、然れども自ら思ふに、一時に總てを企つるとは、目的を達し得べき途にあらずと、乃ち先づ其一を、選て之れを守り、之に熟すれば次に移り、順次十三ヶ條を終る様にすべしと

（千三ヶ條とは禁酒、沈黙、順序、決心、節儉、勤勉、眞實、正義、温和、清潔、靜肅、慈善、謙讓を云ふ）氏は果して此原理通り實行するを得たりし否や、之を想像すると困難なり、何となれば若し汝にして一惡魔を家に連れ歸れば、其全家族、之に隨ひ來るべければなり

② ユヰルソツ「僧正千七百年代」曰く、人若し貧者に金を與え、麥酒店に往て費すべし、往て賭博を試むべし、又往て不用の玩具を求めよと言ふ、あらん乎、之を聞て誰れ喫驚せざるものあらん、實に然れば人に之をせよと言へば、斯の如く笑はるゝ事を、何故、己れ自ら爲すに至るべき乎と

上を見るべし、下を見る勿れ、「ヒューコンヌフホルド」卿曰く、上を見ぬ人は必ず下を見るべし、天空に翱翔する能はざる精神は、自ら地上に匍匐するものなりと、誰れが輕々しく名譽を虛名なりと謂ふ、名譽といふ聲の中には、快潤なる意思もあり、強固なる神系もあり、溫暖なる心胸もあり、彼の死したる偉人を憶ひ、身を壯年より起とし、赤手を揮ふて、誓て彼等の如く貴重なる事

業を爲さんとするも之れが爲めのみ  
 吾等が此世に生存する其實相上に於ては疑ひもなく通常の大望は吾等の  
 一顧を値ひせざる所見よ「セクスピア」「ミルトン」「ニュートン」「デアウウキソ」の如き  
 我偉人は、政府より與ふる名譽、即ち位號には何の負ふ所もなきにあらずや、  
 凡そ通常の大望の大缺點は其決して之を充たす能はざるに在り、譬へば猶  
 ほ山に登るが如く、一峰頂に達すれば更に又他の峯嶺の我前に立つを見る、  
 夫の歴山王、奈破翁の如き大勝利者は決して満足するとなかりしなり、寔に  
 所を得ざる大望の犠牲となりたる者は休むと能はず、又神明に謝すると能  
 はず、「バイコン」曰く勇進に慣れたる人が偶々蹉跌するとあらん乎、忽ち自ら  
 喪心して又原との如くならずと  
 去りながら、光輝赫々たる生涯の一忙劇時間は名もなき一年に値ひすと詩  
 人の歌ひしも少しく過ぎたり  
 一身の大望は、猶ほ迷憐の如く閃々とする虚偽なり、詩に曰く

虚榮は天賦に富める少年の室を求め、其陋隘なる窓を明けて入り来る、此  
 に於て乎、狭まき壁は廣がりて帝王の宮殿の如くになり、屋根は又室に聳  
 ち、何れよりか眼に見る能はざる指の來りて天井に描くに、瑰麗なる紋章  
 を以てし、赫々たる大文字を以て其上に彼が名を記す  
 而して其報酬や何ものなる乎、最上が名譽なり、耳の之を聴くに鈍くなり  
 たる時に「賞讃」之を樂む感情の死したる時に「黄金」之を覆ふ頭髮の灰色に  
 なりたる時に「花冠」之が爲めに刺激せらるべき心の麻痺したる時に「名譽」  
 畢竟するに、吾等が「愛」を要する時に「愛」を除く外、總てのものが來り、而して  
 其背後に接近して「死」來る、即ち吾等が斯の如き利用すべからざる賜の、我  
 物たるを知了する前に、既に吾等は之を剝脱せられて赤裸となり墓田に  
 送らるゝなり

獨り爵位のみにては何かあらん、「マアライ、ダ、メリシス」は佛國の皇后にして、  
 佛國の攝政たり、實に又佛王、西班牙皇后、英國の皇后、「サホイ」公爵夫人の母たり



りしも遂には其子に襲られ其子は領内に置くとすら之を許さず數年間  
殘酷なる待遇を受けたる後「コロン」に於て、墓なくも殆んど餓死せり  
總て帝王の冠は多少の別こそあれ、面倒なる冠なり、人に勝ぐれ、又人よりも  
正しく之を戴くものほど其權勢の責任、重く頭上に落つるものぞかし、若し  
夫れ一判斷の誤にて數千人に迷惑を蒙らすかと思へば心配せざらんと欲  
するも得べけんや  
縦令ひ遅々たるにもせよ、此生は進歩の妙境に向ひ居れり、若し之れなかり  
せば人は殆んど之に耐え難かるべし  
人は常に靜息するものにあらず、成長すべき筈になり居れり、兎も角、吾等は  
多く靜に立ち居る能はず進行するか否らざれば死せざるべからず、人苟く  
も心に望む所あらん乎、先づ其手段と終局に注意するを要す、惡しき手段に  
依るときは、昇る如く見えて其實降り居るとあり、然れば如何にして吾等の  
性質上に於ける此二要點を協同せしめ得べき乎、凡そ我大望は、吾れ自らを

支配するにあらざるべからず、即ち吾等の各自が胸中に有する、眞成なる王  
國を支配するにあらざるべからず、而して眞成の進歩とは更に多くを知り、  
更に多くを有し、更に多くを爲すに在り、此進歩は底止するを要せず、進めば  
進むほど安全になりゆき自ら投機の狀を減すべし、蓋し人の有つべき第一  
最高の大望は其義勉を行ふに在り  
「榮譽なる語は「ウエリントン」侯の書簡中に、曾て見るとなかりしと言へり、之  
に反して「義勉」と言ふ語は其終生の談話なりき  
若し夫れ大望にして到底、遠ざくべからざるものとせば、須らく聖人の大望  
を擇ぶべし、史を翻して之を見よ、十千の大豪傑も一聖人に若かざるにあら  
ずや、同じ名譽の途に於ても虚誇こそ無益の業たれ  
今日貧者たりとも、富人たりとも、貴族たりとも、平民たりとも、百年の後には  
何の差等か之れあらん、然れども正義を爲せしと、惡事を爲せしとに就ては  
尙ほ差等なき能はざるなり

「ラスキン」曰く何を考へし乎、何を信ぜし乎、是等は終に何の効もなかるべし、効あるものは獨り何を爲せし乎の一事のみと、時に曰く

何れの所にか才智を發見し得べき、何れの郷か是れ理解の郷ぞ、人は其價値を知らず隨て之を生きたる此陸上に發見する能はず、奈落は曰く我に在らず、滄海は曰く我所にあらず、黄金以て求むるに由なし、況んや白銀よく其價に直るを得ん

珊瑚も眞珠も以て之を計る難し、才智の價は紅寶石の上にあればなり、神明を畏ると、是れ即ち才智なり、惡より遠かると、是れ即ち理解なり、正直にして信義を守るべし、「ソイン、ポール、リッター」曰く地上に於ける第一の罪は「偽」なり、而して幸にも是は智識の樹上に於て「惡魔」の犯す所に係ると、正直は、最上にして又唯一なる正しき政略なり、「虛偽」の心は神明の嫌惡する所なれども正義の人は其の喜ぶな所なり

「チヨチサア」曰く信義は人の有するを得べき最も高き物なりと、又「クラレ

ンドソ「マロクラント」英國の大臣、千六百四十三年戰死を評して曰く彼は嚴正なる「信義」の崇拜者たり、左れば彼は詐譎せんよりは寧ろ容易に身を盜人に落せしならんと

「信義に遠かるとは取りも直さず、人先づ神明を無みし而して後、人を忍ぶ」と云ふ行狀證を與ふるに同じし

若し惡しかりしなれば、之を耻づると當然なりと雖も、惡しかりしと白狀するとは決して之を耻づるに及ばず

「人を人たらしめ、其生涯に於て爲すべき等の業務に適せしめんが爲めには、無數の資格を要すと雖も就中、之れなくんば人、人たる能はず、眞成なる大生涯を過さず能はず、眞成なる大事業を成功せしむる能はざるものあり、信義是なり、即ち内心に於ける信義是なり、總て眞成なる偉人と、善人とを見よ、何を以て吾等は之を偉人、善人と稱するや、其斷乎として、其身自らに對して信義を守り、毅然として有りの儘ならんとするが故なり、先づ已れ自らに對し

て、信義を守らん乎、猶ほ夜の晝に伴ふ如く、焉んぞ人に對して虚偽を働くを得んや、是れ第一義なり」

二八〇

「ライツウォース」曰く互に相反するが如くに見ゆれども、其實相并行せざるべからざる二事あり、男らしき附庸と男らしき獨立、男らしき依頼と男らしき自立、是なり」と、先づ従ふべきことを知れば如何に命令すべきかを知るを得ん、練習は心の爲めにも、身の爲めにも并せて好節制なり、惡しき兵士は決して其將軍となる能はず、漫に自負に任せ、來りて吾れに伴ふ成功を失ふ勿れ、自負は亡滅の前驅たり、漫心は没落の前に來る」

吾等は屢熱情を行爲と聯想し、耐忍を不行爲と聯想す、然れども是れ過れり、耐忍は力を要すると同時に、熱情は寧ろ弱點の兆候にして、又克己心の缺乏を示すものなり

人若し權勢の地位に置かれん乎、意を加えて正義を守り、且つ禮讓に勉むべし、「サライ」の話に東洋の「王」曾て罪なき者に死刑を宣告せし時、其者の言ひ

けるには「王よ、汝自らを救るせ、吾れは瞬間の苦痛を受くるのみなれども、罪は終世、汝に伴ふべし」と

權力は之と共に責任を齎らし來る、然れども如何なる場合に於ても己れが爲すを好むものと思はず、唯己れが爲すべき筈のものと思へ、是れ幸福の境に達する唯一の正路なり

若し二個の義務間に疑點の存するあれば、其近き方を執るべし、或る著名なる人にして、無神者を化せんが爲め、己れが家族を打棄て置きしものありと雖も、慈悲は慈善の如く、須らく先づ家庭より始むべきなり

此世界に於ける万物は正道の爲めに作らるゝ、是れ吾等自らの容易に證明するとを得る所、今吾等は罪惡を責罰すと云ふ、誰れか之を責罰する乎、吾等は、吾等自らを責罰するなり、此世界は、善根は樂みを齎らし來り、惡業は悲みを齎らし來る様になり居れり、造化此法則に反するは罪惡にして、乃ち之が爲めに苦むなり

罪を赦すなどは責罰を受けざるべしとの謂ひにあらず、是れ特り不可能なるとたるのみならず、又實に不運なるとなり、實際、惡業を行ひて繁榮する程大なる不運なし、一たび惡業を爲せば其記憶は長へに残りて消ゆるとなし、我害したる人は吾れを赦るしもせんが、斯く赦さるゝは即ち我頭上に火になりたる石炭を積まるゝに同じ、人の寛恕は總て己れの害惡之益、黒く見えしむるものなればなり

行狀は生命なり、終には幸福も、繁榮も之に繋るべし、外面の形勢は比較的、重からず、吾等を取圍むものゝ如何は、吾等自らが如何にあるかと云ふ程に大切ならず、左れば日々己れ自らを警衛すべし、習慣は第二の天性ぞかし、一個の行爲を時く時は、一個の習慣を收むべし、一個の習慣を時く時は、一個の品性を收むべし、一個の品性を時く時は、一個の運命を收むべし、惡き方にか、善き方にか、吾等は總て毎日少し宛、發達するものなり、夜に入りて自ら尋ねべし、何れの方に進みしかを、

「エマソン」曰く人類は之を二階級に分つを得べし、恩人と罪人はなりと、若し吾れ後者に屬せん乎、友は敵となり、記憶は苦痛となり、生涯は悲哀となり、世界は獄舎となり、死は恐怖となるべし、之に反して若し一個澄明にして善真なる思想を他の心中に置き、一個幸福なる時を、他の生涯に付與するを得ば、即ち是れ天使の業を爲したるものなりと

何れの人にも、毎日一時間、又は半時間、養靜と思考の爲めに閉ぢ籠るとを得ば、其効や如何に大なるべき歟、其時間なしとはいへまじ、サー、ロバート、ピールは毎夜議會より歸りし後、聖書の一章を讀過するを例とせり、當時は素より議會も今日の如く長時間の討議を爲さざりしと雖も、

善しと思ふとを考ふべし、然るときは惡しきとを爲さざるべし、死と神の裁決、天と地獄に就て、屢考ふる者は必ず死を善くすべし、

而して其報酬や大なり、我子よ我法則を忘るゝ勿れ、我訓誡を心に銘せよ、長日、長生と平和は來りて汝に加ふるならん、

萬事を等閑に付する勿れ、若きとて自ら假借する勿れ、マアグエライト、ダ、ヴ  
アロイス顯理二世の女、千五百七十二年、佛國顯理四世の皇后となる、曰く既  
に吾等の骨の上に肉の無くなりたる時は、何れも皆十分なる徳性を有する  
に至ると

「汝が壯年の日に汝の造化を記憶すべし、望み通り死せんと欲せば、生きる筈  
に生きざるべからず、善人の爲めには死は更に恐るべきものにあらざ、僧正  
（サアルウオル）千八百七十五年に死すは其最後の病中に、次の語を七ヶ國の  
語に翻譯するとに勉めたり曰く睡眠は死の兄弟なれば睡眠の死より、死の  
睡眠より吾れを醒ます其人に、身を委ぬる様注意せざるべからず

「シセロ」の語に、ソクラテスが論告者の前に在るや、其言ふ所、死罪の宣告を受  
けたる人の如くならず、唯天に昇りゆかんとする人の如くなり」と

「セネカ」曰く汝若し汝の義務を勇膽に、且つ寛仁に果たし終らん乎、其爲め汝  
の得る所は何物ぞ、其義務を果たせりと云ふとが、即ち汝の得ものなり、其事

自らが汝の得ものなりと、吾等は正しき事は爲すべき筈なれども、是れ敢て  
後に期する所ある爲めにわらず、又責罰を恐るゝ爲めにもあらず、唯善を愛  
する爲めのみ、何となれば、神の行狀證明書は我心の深く喜ぶものなればな  
り

徳の應報は徳なり、尤も或る人に對しては、之を罪惡より逡巡せしむる爲め  
の誘導として、不可思議なる應報と、責罰を必要とするところあるべし、（スピノザ）  
（和蘭の數學者、千六百七十七年に死す）曰く吾れは此人の如何なる困難の裏  
に呻吟するかを知了せり、彼は地獄の恐ろしさに制禁せらるゝとなかりせ  
ば己れが快樂に耽ける人の一なり、彼が悪業に躊躇し神命を充たすとは、猶  
ほ己れの意思に反して生命を奉ずる奴隷の如し、而して彼は其奉公に對し  
て、愛神の念よりも、更かに己れの嗜好に適し、其初め徳性を好まざりし割合  
に比すれば更に大なる賜を報酬として神に期せりと、他の所に於て同氏は  
又「裁決を受けんが爲め神前に出て、己れが神心の重荷に對する報として、無

數の恩恵を與えられんことを期する敬神者の實相を反對の側より描出せり、曰く眞に賢しき人の爲めには、恩恵は徳に對する應報ならず、其應報は徳其もの是なり、而して之に違する道は、素より險なりと雖も發見するを得ざるにあらず、稀有にして之を得るとの困難なる程、其物は秀絶なるものなりと

吾等は自ら完全なる能はざるを知る、然れども品性其他、何事に就ても完全を期せざるべからず、且又吾等が心中には確かなる導者あり、若し眞心の指示する所に従へば左迄の惡境に進入するものならず、心の持ち様にて貴き生涯を送るとを得らるゝなり

左れば常に我前に、出來得る限り最高なる理想を描出せよ、吾れ自ら我上に身を高めると能はずんば、如何に人は哀れなるものぞ

「セクスピア」が「マアク、アントニイ」をして「ブルウタス」を評せしめたる其語に曰く彼の生涯は高尚なり、而して造物者が突立ち上り、世界の大衆に向て是

こそ男なれと言ひ得べき程の諸原素、其心中に混同せりと、男は誰しも遂には斯の如くに謂はれ得る様、身の行狀を慎むべきなり、恐らく是れ男たるもの、唯一の目的たるべし、若し又女たりせば、人を誑め、人を慰め、且つ人に命する様、尊く作られたる完全なる婦人にして、シカモ其精神の靜肅澄明なると天使の光の如くなるべし

「サア、ウオタア、スコット」が臨終の床上に於ける「ロックハート」に對する最後の語は、有徳者たれ、崇神者たれ、善人たれ、今此期に臨んては、之を除けば何事も心を慰むものなしと云ふに在り

「アラマム」逆臣すらも尙且つ希へり、吾れをして正義者の死の如くに死せしめよ、吾最期をして彼の如くあらしめよと

### 第十八章 平和と幸福

繁昌と幸福とは必しも常に同行するものならず、何一つ事缺かす幸福たる

べき筈に見えながら尙且つ悲境に在る人少とせず、ハックスレイ博士の云へりし如く、造化は其最も強き寵兒には如何なる物をも與ふるを得べしと雖も唯、彼を幸福の人たらしむるを得ず、彼にして幸福たらんと欲せば之を已れに求めざるべからず、兎角娑婆には危険や心配多く、人若し自ら幸福の原素を得る能はざれば、此世界に於ける總ての美も、變化も、快樂も、利害も得て之に幸福を付與する能はず、シヨッペンハウエル曰く此世界は甲には荒蕪、遲緩、淺薄なれども、乙には富穡、有趣味、多意義なりと、蓋し幸福は「ヴァイヲリン」の如く習熟するを得べく、即ち若し吾等にして正しき手段を執る時は忽ち來るべしと雖も、餘り好奇的に之を求むべきにあらず、吾等の最大なる樂みも「チロヒュークス」同様に之を顧みんとて頭を回らす時は直に迷界に還り去らん「チロヒュークス」は古昔の詩人にして草木をも感動せしむると云ふ高評ありし人なり、此人曾て其最愛の夫人を失ひ、之を尋ねて幽篁に到り、閻羅王に請ふに、其夫人を助け返されんとを以て、王即ち地上に還る迄決

して後を顧みるとなれば返し遣さんとを約す、此に於て其約に従ひ冥界をタドリ漸く地上に達し、今しも上がらんとするに臨み、思はず後を顧みれば今迄隨ひ來りし其夫人は忽ち消滅したりといふ眞言傳はれり、左れば快樂を避くべし然るときは快樂隨ひ來らん

餘り多く吾れ自らに就き考ふる勿れ、吾れは此世に於ける唯一の人にあらず

ラスキン曰く樂みを求むる勿れ、唯何時にても樂み得べき様覺悟し居るを要すと、總令以少なる快樂なりとも此生涯に快樂の斷間なからしむるは容易のとにあらず

蓋し「快心」は人に對する特殊の天賜なり、動物には理解力あるや、否や疑はしき所もあれども、其「快活」と云ふ天稟を有せざるは明白なり、「チャムフオート」(巴里の滑稽文學者、千七百九十四年に死す)曰く笑はざる日は最も損なる日なりと、凡る快潤なる笑聲を聞く程樂しきと復た他にあらんや、何事も之れ

が爲めに輕快となるべし、快潤なる心は終日倦むとなしと雖も、悲しき心は一哩ならずして忽ち疲る。或る僧正曰く、快心は耶蘇教旨の十の九に當ると、假令ひ人の爲めに怒らざるゝとも、大陽をして汝の怒の上に没せしむる勿れ、明日迄怒りを保つべからずとの意、凡そ争ふには兩人を要す、汝其一人なる勿れ。

常に不平を絶たざる人あり、斯の如き人は「エデン」の園中に生るゝとも尙且つ大に苦情を述ふるとならん、又到る處幸福なる人あり、斯の如き人の爲めには其身邊を圍繞するもの悉く美と神恵たらざるなし、若し地下の恐怖を鎮め盡くし、希望失敗せず愛情衰亡するなくんば果して此地は如何なる天に成長すべきや。

嬉れしき心は道德の一大強壯劑なり、日の光は花を發かしめ、又菓物を熟せしむ、その如く嬉れしき心、即ち自由活潑なる感情は最上なる善根を吾等の心裏に發育せしむ。



## 人 の 一 生

嬉れしき心は吾等の、人に盡くすべき一個の義務たり、虹の地に觸るゝ處には金盃ありと云ふ昔話あり、人によりては其微笑、其音聲、其出現が猶ほ太陽の光線の如く、之に觸るゝものを皆黄金に變せしむる様に見ゆるあり、苟くも嬉れしき心のある間は人は決して墮落し去るものにあらず、快活なる心は夫れ自らに對するの外、人に對しても亦間斷なき響應の如し、フクロンズナイチンゲェル、篤志の婦人にして、千八百五十四年、英露の戦に看病婦を引卒して戰場に向ひ、大に負傷者の看護に盡くせり、の影は其藥よりも更に効あり、若し吾等にして人の重荷を分つなれば、是れ即ち吾等自らを輕めるなり

嬉れしき心は淺慮の致す所なりと想ふ人もあるが如くなれども、別段兩者の間に必須の關係あるにあらず、アノノルド曰く、輕快なる精神は寔に地上に於ける最大神恵の一にして、屢熱心なる考と、深切なる愛とに伴隨す、而して其之に伴隨するや、神に對して恐物と見ゆる者の、淺薄頑固と相結合する

時に比し、更に大なる尊嚴を以てするなりと  
 生れながらにして終生、苦役の宣告を受け居るもの少とせず、然れども是れ  
 獨り貧者のみに適用すべからず、富人と雖も同様、苦き働を爲し居り、時に或  
 は貧者よりも一層甚しきものあり、尙又世には己れが有する金錢の爲め悲  
 境に在るもの随分、數多し、即ち斯の如き人の生涯には安息も、靜穩も、平和も  
 なきなり、素より此世界に於ては苦痛なき能はずと雖も、心の持ち様にて之  
 を凌ぐことも亦出來難きにあらず、但しシカせんには吾等の「記憶」と云ふ室  
 壁に、美麗なる圖畫と幸福なる「回想」を懸けざるべからず  
 總ての人は皆自ら樂まんとを希ひながら、サテ如何にして樂むべきかを知  
 るもの極めて稀れなり、要するに彼等は此生涯の尊嚴と、喜悅とを現實にす  
 るを得ざるなり

些細なる困難を大層に擴張する勿れ、「セシロ」曰く、苟くも天地の大道に通す  
 る人の爲めには、何ぞ此生涯に於て困難と稱すべきものあらんや、其心常に

警戒に怠らず、何事にもあれ豫期せざる事の、其頭上に落ち來るとなき賢人  
 に取りては、人の智識と、此短生涯との上に於ては、更に偉大と見ゆるものな  
 しと

僅に引掻かれたる計りの傷をも、死ぬ程の大怪我と想ふと屢あり、「フロラー」  
 曰く、曾て一外科醫あり、僅なる創傷の爲めに迎へられたる時、大急ぎにて膏  
 藥を取りに遣せり、之を見て傍なる人は、夫れ程危険なりやと尋ねしに、外科  
 醫の言ふには、否とよ使の者早く還らざれば、其中に創傷は自ら癒着する恐  
 あればなりと、實にや時は悲をも、創傷の如くに治療し終るものなり

「鍊磨したる心」敢て哲學者の心を謂ふにあらず、唯智識の源泉、既に開發せら  
 れ、相應なる程度に於て、其能力を働かし得べき心を謂ふは總て己れを圍繞  
 するもの、中に於て、無盡なる趣味の源を發見するなるべし、造化自然の事  
 物、美術の製作、詩歌の想像、歴史上の出來事、又は人の過去、現在の方法手段と  
 未來に於ける其見込等、一として趣味なきはなし、尤も始めより此等の事物

に對して道徳上、即ち人類上の利害を有せず、唯好奇心の満足を此中に求むるのみとすれば、總て此等の事物に無頓着なるとをも得べく、又其千分の一をも査覈するとなくして止むを得べし」

吾等は花や、木や、艸や、川や、湖や、山や、日光の世界に住むなり、造物は磊塊なるものは磊塊に、適意を喜ぶものは適意に、之を遇す

唯夫れ美を賞せんとせば美の觀念なかるべからず、犬や象の智あるとは屢聞く所なりと雖も、此世界に於ける美景が之に何等の快樂を與ふべきぞ、想像せんとするも得べからず

折々人の無爲に苦むを聞く、然れども是れ畢竟其身の招く所なり、若し教育ありて健康を有し、眼を有し、手を有し、閑を有する人にして爲す事なきに苦むものあらん乎、ソハ唯神明が總て斯の如き恩恵を、之を味ふ價值なき人に付與したるに因るのみ」

富貴も必ず幸福を保し難し、愛情も、慈善も、心神の平和もなき人と雖も尙且

の富みて權勢赫々たるを得べし、然れども幸福に至りては吾れ未だ之れあるを知らず

比耳斯亞の話に云へるあり、或る大王不豫なりし時、其星占者に諮りしに、十分幸福なるもの、襦袢を得て之を着るときは、忽ち幸福なるを得べしと答ふるに、付廷臣は言ふも更なり、有らゆる國中の富家に就き之を求めしも、斯の如き人を探がし得ず、偶々一労働者の今しも其仕事を終りて歸るに逢ふ、之を見れば全然條件に適合して十分幸福なり、然るにコハそも如何に、之にても尙ほ大王を治療する途なし、此男襦袢を着け居らざりきと

幸福は金錢を以て購ひ得べきものに、あらず、又權勢を以て掌握し得べきものに、あらず、賢者の皆一致する所に、して予既に之を證せり、抑も帝王の冠は之を繞らすに困難を以てす、ヒエロシラキユースの王、紀元前四百六十七年に死す、シモニエデス（希臘の詩人、ヒエロ）に語りて曰く、人類の大部分は王者の壯麗に眩惑せらる、衆皆主として眼に視る所を以て、人の幸

不幸を断定するが如くに見ゆるは敢て驚くに足らず、觀來れば王者は人目を引くに足るべき最高の形象を、此世に示顯して肅々堂々たるに似たりと雖も、同時に人類の幸も不幸も共に棲息する其心魂の深奥には、王者たるの困難潛み居れり、即ち王者は最大なる樂みの最小部分を有し、最大なる弊惡の最大部分を有するものなると吾れは自らの經驗に依りて具さに之を知り、今之を汝に保證せんとすと

人の不幸なる場合には「マシロン」佛國の大説教家、千七百四十二年に死すの勸言に依り慰諭せらるゝと多かるべし、即ち其言に曰く「ヲ、人よ、何れの所より來りしか、問ふにも及ぶまじ、此世は假定にして汝の郷土にあらず、汝は天の爲めに作られたるものなれば、神にとりて善からざるとは汝にとりて善かるべき筈なしと

然れども快樂の變化窮りなき光輝と、總て善根を得る方法を語らんとするも、全然語る能はざるを如何せん、唯最大なる善根に就て吾等の精一杯、言ひ

得る所は、即ち知るとも出來ず、説くとも出來ざる嬉しさの心中に徘徊するとは是なり、又最高なる神惠に就て同しく精一杯に言ひ得る所は、唯之を言語に發し難しと云ふとは是なり

若し吾等にして正當に考へん乎、總て「ダンテ」の歌ふが如くならん、其詞に曰く

即ち我見し所は平等なる至樂なりき、一個天地間の微笑は萬物に涉りて見ゆ、樂みは比較の度を超せり、喜びは言話に盡くし難し、平和と愛情の生涯は不朽なり、富は無盡にして、幸は不測なり

天地間の萬物は、適當にして恵みある方則を以て整理せられ、互に相關連して善事の爲めに働く、左れば若し吾れ苦む所あらん乎、是れ己れの過誤に因るに非らざれば公益の爲めたらざるべからず、「セネカ」曰く、之を履行して其爲め一層己れを幸福たらしめざる義務あるなし、誘惑にして其矯正の途を有せざるものなしと

「シセロ」の言によれば、イピキユラス「希臘の哲學者、紀元前二百七十年に死す」は慾望を分ちて三種ありとせり、自然にして必要なるものは其の一、自然なれども必要ならざるものは其の二、自然ならず又必要ならざるものは其の三、而して其必要なるものは、大なる面倒と費用を須るずして之を充たすとを得べく、自然なれども必要ならざるものも亦尚ほ大なる手数を要せず、自然夫れ自ら、己れを満足せしむるに足るだけの富を作り、之を得るとも易く、其分量にも限あればなり、然れども無益なる慾望に至りては、其際限と適度を見出すと出来難し。

去りながら十分に此生涯を樂まんとせば、須らく克己の覺悟を爲し、多くの誘惑的の快樂を避けざるべからず。

放縱に依てよりも、克己に依て、更に大なる幸福を有するを得べし、感情は眞の樂みを以て充滿するが如くなれども、若し之を縱るして制する所なからん乎、昔の「サイレン」海員を迷はす、妖婦の如く、此生の岩礁と盤渦の上に吾等を難破せしめ去らん、人の意思に制せられざる様に生れ、且つ教えられたる人、正直なる考を其甲冑となし、純然たる信義を其最上の巧手段となす、人斯の如き人は如何に幸福に富みたる人乎や。

吾等が暇の少なきとは、寔に此時世の一不運なり、吾等は常に走車の上に在るが如し、「ポーチア」有名なる女優が、我少なき身体は、此大なる世界に倦み果たりと云ふたると同じ感情を有する婦人、何ぞ甚だ多きや、男子と雖も亦同様なるべし。

然れども善き仕事は、急ぎては出来るものにあらず、思考には時間と靜肅とを要す。

キングスレイ曰く、予は知る、總て吾等が要するは、内部の安息、即ち心と腦の安息、穩和、強固、自制、克己の品性なることを、而して此等は沈鬱の發作なきものなれば、興奮せしむるを要せず、激昂の發作なきものなれば、魔睡せしむるを要せず、神の賜を濫費するなく、十分に之を用ゆる力あるものなれば、敢て行

を難破せしめ去らん、人の意思に制せられざる様に生れ、且つ教えられたる人、正直なる考を其甲冑となし、純然たる信義を其最上の巧手段となす、人斯の如き人は如何に幸福に富みたる人乎や。

吾等が暇の少なきとは、寔に此時世の一不運なり、吾等は常に走車の上に在るが如し、「ポーチア」有名なる女優が、我少なき身体は、此大なる世界に倦み果たりと云ふたると同じ感情を有する婦人、何ぞ甚だ多きや、男子と雖も亦同様なるべし。

然れども善き仕事は、急ぎては出来るものにあらず、思考には時間と靜肅とを要す。

キングスレイ曰く、予は知る、總て吾等が要するは、内部の安息、即ち心と腦の安息、穩和、強固、自制、克己の品性なることを、而して此等は沈鬱の發作なきものなれば、興奮せしむるを要せず、激昂の發作なきものなれば、魔睡せしむるを要せず、神の賜を濫費するなく、十分に之を用ゆる力あるものなれば、敢て行

者的の牽束を要せず、一言以て之を覆へば、單に飲食のみならず、總ての慾望思想、及び行爲を節制する品性、昔の「アダム」が之に陥り、豫て禁制せられたる手段によりて、光輝と生命とを求め、其代りに病と死を得たりし、野卑なる快樂と大望とに染むとなき品性、是なり、然り、夫に相違なし、予は之を知れり、予は又此安息は、唯汝が既に之を發見したりし所のみに發見せらるゝとを知ると

「ラスキン」曰く吾等は多くのもの、缺乏に就きて詫つ、即ち選舉權も入用なり、自由も入用なり、快樂も入用なり、金錢も入用なり、然れども誰れか平和の入用なることを知感するものあらん、若し平和が入用なれば之を得る途二つあり、其一は全く己れ自らの力に依るとにて、即ち我心を樂しき思想の巢窟たらしむるに在り、……誰れとても魔はしき思想、總ての災禍に對し安全なるを以てすれば、如何に立派なる宮殿を建るとを得べきか、少壯の時より曾て教えられたるとなき故、從て誰れも之を知るものなし、明快なる想像、滿

足せる記憶、尊き歴史、信ある言語、高貴にして靜肅なる思想の寶藏、總て是等は心配も之を動亂するとなく、苦痛も之を曲辭ならしむる能はず、貧窮も之を取去る能はず、即ち我心魂の住處として、手を用るずに建たる家屋なりと、賢良なる羅馬の大帝「アントニナス」の死せんとする時、枕邊に侍する臣下に對する最後の命令は「靜にすべし」と云ふ語なりき、何ものも曾て耶蘇の生涯の靜穩を破りたるとなかりき

「セント、トーマス、マクムピス」曰く慾望を斷てよ、然るときは此心平靜ならんと、吾等は此生涯に於て些々たる事に就ても、大事同様に苦むと多きなり、人類が惡事として難責せらるゝ總ての中に就て、彼等自らの惡質こそ、確に最惡のものたれ

「エクレシヤマチカス」神學書の一に云ふあり、完全なる身體に上越す富あるなし、心の喜びに上越す喜びあるなしと

吾等は幸福を外部に求むべからず、吾等自らの上、即ち之を我心の上、に求む

べし、天國は己れが心裏に在り、若し此世に於て幸福なるを得ずんば、何ぞ之を來世に期するを得ん、神明は果して現世よりも未來に於て多く吾等を守らせ玉ふべきか、若し吾等にして此地上に於て平和なる能はずんば、何ぞ天上に於て平和を見るところを得ん、そも吾等の平和を奪ふは何ものぞ、高慢と嫌惡、放縱と大望是なり、去りながら此等の悪性を以てするも、尙ほ此世に於ては幸福なるを得べき望あれども、此等の悪性を懷きて天上へ往けば、恐らく決して幸福なるを得ざるべし、吾等果して此世に於て我價値ありとするものを失はんと、の恐怖大なれば、天上に於て、其恐怖の更に大なるべきは言ふ迄もなかるべし、此世に於て人と平和に暮らすとを得ずんば、何所にか之を期するを得ん、若し吾等の平和と幸福とを、國外の事物に歸すべきものとし、一に望を來世にのみ屬するるとせん乎、來世へ往けば復た來世の來世へ望を屬するるとなり、遂に盡くる時なからん

疑ひもなく幸福は豫期、常用及び記憶に於て三たび其恵に浴すべしと雖も

就中、純潔にして廣大なる幸福の源は豫期に在り、吾等が愛せし其人、吾等が失ひし其人に再び會見するの希望、今吾等には隠れ居る事物を明かに見るを得べき希望是なり、今や予は此適意と喜悅の源に對して何事をも暗らざるべしと雖も、之が爲め吾等は現在の恩恵を下げし、且つ輕んずべからず、  
「ケアル」が云ひし如く自ら此身を持する様に勉むべし、曰くテ、主よ、我神よ、汝は汝の神聖なる意思を執行せよ、吾れは靜かに横はらん、吾れは更に煩悶するなかるべし、汝の手を離れ、汝が吾れを慰諭する其好意を破らんとを恐るが故なり、我大父の胸間に籠り居るは十分なる安息なりと  
即ち唯、造物自然の靜慮、星斗燦然たる空に於ける沈黙、人里離れて靜かなる山中の睡眠、を樂むべきなり  
然るときは昔し「マムマア」の野に於て「アブラハム」に向て出現せし如く、天使は吾れを見んとて我家に來るべし  
「未だ人の知らざる多くの新しき樂みあり、文明の大道に沿ふて進むに従ひ

之を發見せんと蓋し必然の事たるべし

「心魂と軀軀と相合して完全なる人を作る、若し心魂適當に命令し憫み深く支配し、利益ある様に注意し、不足なき様に供給し、慈善の行ひをなすときは、軀軀は其組合たると雖も下席なり、若し軀軀法を作り、食慾の暴威に任せて先づ理解力を輕侮し、意思と選擇との要部を占領するときは、軀軀と心魂は既に適當なる組合ならず、人は愚となり、悲境に陥るべし、即ち若し心魂にして支配するを得ざらんか、最早之を其仲間と謂ふべからず、要するに心魂は支配するか否らざれば奴隸となるべきなり」

若し吾等にして此生涯を樂む能はされば、是れ吾等自らの過なり、ラスキン曰く總ての人は樂むとを得べし、然れども之を成功せしものは稀なりと、苟くも此心を平和に、且つ幸福ならしめんとせば、之に充るに賢明にして貴重なる思想を以てせざるべからず、プラット「其アヒドラス」中に云へるあり、神心は美なり、智なり、善なり、其他此類なり、此等を以て心魂の翼を養ふと

きは速に成長すべしと雖も、若し弊惡を以て之を養はん歟、忽ちにして衰耗消盡すべしと

左れば其選擇を慎まざるべからず、喜びを連れ歸り、心の中に其住み所を作り、之に成長の時を與へ、又之を愛養せば、汝が田畝に耕す時、又は曉を冒して耘ざる時、屢來りて汝の爲めに謠ふべし、嬉しがらせらるゝは美しき風習なり、喜びは吾等が神に謝すべき賜なり

「ソクラテス」曰く最上なる人とは、自ら完全ならんと欲して大に勉むる人なり、最幸なる人とは自ら完全ならんと欲するとを、大に感ずる人なりと

### 第十九章 宗教

神學上の宗教は依然として尙ほ大識者にも不可思議たりと雖も、義務上の宗教は三尺の童子にも明白なり

「ゼレミイ、テイロア」曰く義務の箇條書きは「アボ」の演説の如くに其の意義



多岐其叙述錯綜其主意秘密其手段幻怪ならず又事に當りて其豫期の外に出つるとなし義務の個條書きとなる神の詫宣は暗空の朗々たる如く明月の皓々たる如く日光の熙々たるが如し今夫れ或る一事の晦暗となりゆくものあらん乎吾等は其正當なる探究に従事すべきと無論なりと雖も唯之を明白に合點し得る迄探究せば夫にて可なり別に之れが爲め有罪者として牽束を受くべきにあらず

雄辨にして正義に富む「フーカス」の云へるには人の微小なる頭腦を以て神明の所爲を究めんとするは危険なり神明は生けるが如くに在まし而して人の御名を唱ふるとを納受し玉ふは吾等の知了する所なりと雖も吾等が最も十分なる知識を以てするも眞に神明は如何なるものなる乎を知る能はずと云ふとを知るに過ぎず乃ち吾等が神明に關する安全なる辨力は却て沈黙に在り吾等明白に白状せば神明の光輝は之を口に説くを得ず又其雄大なるとは吾等心力の及ばざる所なりと

## 人 の 一 生

「ロック」の兒童に對して云ひし語は、之を成人にも適用するを得べし、曰く彼等に此神明の愛すべきと、貴ぶべきとを注入すべし、夫れより上の事を説明せずとも、初めは右にて足れり、若し餘り早く神の眞心を説き聞かせ、又未だ其時ならざるに之れが不可思議なる天質を了解せしめんとする時は、却て其頭腦は虚偽の念を以て充たさるゝ乎、左なくば其心は不明不解の念を以て混雜を極むるに終る虞あり……人も一般に神に對する觀念は此邊に止め、何れも皆不可思議なりと承知する其實體に關し、徒らに好奇心を驅るとなれば可なり、否らざれば思想の強固澄明ならざる多くの人に在りては、自ら出來ると、出來さるとを區別する能はず、遂に迷信に陥り神を其身自らの如くに思惟するか、或は無神論者の如くに神を實際に無きものと思惟するに至るべし、彼等に在りては是より上は了解すると能はさればなり。

「ラウエル」米國人にして詩人、千八百八十年に英國駐在公使たりは特に好ん

て「マヨソンの」語を引けり、曰く吾等を我感情の制する所たらしむるなく過去と遠方、即ち未來の現在より重きものたるを知らしむるは、是れ吾等の神明を思ふ階段を進むる所以なりと

神學と宗義とは學術なれども之を宗教の眞諦と謂ふべきものにあらざ、宗教は人の日々の生活に對し、行狀の原則、繁昌の指南針、災禍の慰諭、憂苦の援助、危難の避け場所、悲痛の吊者、平和の天國なり、宗教は又或る觀念に於て、體驅と心魂と双方に關す、原と軀驅は心神と共に總ての名譽を以て之を遇すべきものなり

「フヒツチ」日耳曼の哲學者千八百十四年に死す、曰く宗教は人の職業を抛ちて何日何時より之に従事すると云ふが如き業務にあらず、變化もなく、停滯もなく、夫々其行路を進む一切の思想と、行爲とに浸染して、之を制馭する深奥なる精神なりと

聖書は不可説の意義を以て、吾等を眩迷せんとするものにあらず、寧ろ斯の

如き妄想より吾等の思想を轉せしめんとするものなり

「モゼス」曰く今日吾が汝に指示する此訓戒は、汝に包み隠されたる者にあらず、又汝に遠く隔りたるものにあらず、誰れか吾等の爲めに天に昇りゆき、吾等の聞くを得、爲すを得る様、之を吾等に齎らし來るものと、汝をして叫ばしめんとするが如く、天に在るものにもあらず、又誰れか吾等の爲めに海上に走りゆき、吾等の聞くを得、爲すを得る様、之を吾等に齎らし來るものと、汝をして叫ばしめんとするが如く、海外に在るものにもあらず、唯其語は汝に近くして、汝の之を爲し得べき様、汝の口にあり、汝の心に在るなりと

「ライサス」教法師の質問に答へて曰く、汝は總て汝の心を以て、總て汝の精神を以て、總て汝の意を以て、汝の神を愛すべし、是れ第一にして、又最も大なる訓戒なり、第二も亦之に似たり、汝は己れの如く、汝の隣人を愛すべし、總ての法則と豫言は此二者の上に繫ると

「セントゼムス」曰く神なる父の前に、潔くして穢れなく事ふるとは、父なき

子や、寡婦を其憂愁の境に訪ひ、又自ら守りて世に汚されざると是なりと吾等は何れより來り、何れに向て去るかを告ぐる能はず、又必ず何を考へ、何を信するかを定むる能はざれども、心中に於ては常に、概ね何事の爲すべきものなるかを知悉せり、我隣人に對する勉めは神に對する勉めの一部なり、中世紀の義勇卒等は自ら神の友にして人の敵なり」と口外せりと雖ども、凡そ是れほど全然耶蘇教の眞意を誤解したるもの他にあらじ、神を愛する心は、人を愛する心に依りて最も明著となるものなり

吾等時として人に對し不足なき能はず、其時は宜しく記憶すべし、若し吾等にして自ら思ふ通りにならぬものなれば、何とて人の皆、吾れの如くなるを期すべけんやと云ふとぞ

縱し又其不足に就き正當なる理由あるにもせよ、吾等は之を許容すると、猶ほ吾等自らの斯る場合に當り、人より許容せらるゝとを望むが如くすべし、「ゼイター」の勸言せし如く、七度は愚かなと、七十七度迄も之を恕すべし

人心多くは、幸福の望みよりも、却て大に苦痛の行爲を恐る、「フアツァシヤム」寺の中に古碑あり其文に曰く

誰れにもあれ、寔に臨終の床より寤夢に、寤夢より無限地獄に陥るとの辛らさを考慮するなれば、縱令ひ全世界が手に入るとも、決して一罪をも犯さざるべし

吾等は警戒を怠るべからず、又契約を輕んずべからず、光りの汝に伴ふは僅かの間なり、光りの有る中に歩め、否らざれば暗黒、忽ち來らん、暗黒の裏に歩む人は何れに向て往くかを知らざるなり

「故に予が此等の語を聽て、其通り爲さざる人は、猶ほ宛も砂上に家を建つる愚物の如し、雨降り、洪水來り、風吹き、其家を打てば、家忽ち仆れ、其損害や大ならん、之に反して、予が此等の語を聽て、其通り爲す人は、猶ほ宛も巖上に家を建つる智者に同じ、雨降り、洪水來り、風吹き、其家を打つとも更に仆るゝとなし、何となれば其巖上に建てられ居るが故なり」

何よりも先づ他人を誘惑する人を咎むべし、殊に幼者に對するものを然りとす

三三三

「害の來らざらんとは期するに由なし、去りながら之を齎らし來る其人は之を咎むべし、幼少なるものを害する其人は首に石臼を縛り付けて之を海に投ずる方、優れりとす」

「經令ひ全世界を得るとも、代りに己れの生命を失ふなれば、其利する所果して如何、そも何物か能く人の生命に代り得べき」

吾等は素より多くの罪を犯し居れりと雖も、其爲め何れの道、何れの事に就ても人を失望せしむる勿れ

耶蘇教は「恐怖」よりも寧ろ「希望」の宗教なり、吾等は我思想上に於て此兩者を適當に結合せしむるを得べし、即ち「レイ」の「死」と神の裁決と、天と地獄の事を屢思ふ人は自ら善行を爲すべし」と云ひしが如し

人は驅逐せらるゝよりも、最も容易く誘導せらるゝ、又實例は示説に優る、宗教

法院の恐ろしさを何とも思はぬ人も、「ドラモンド」の云ひし眞理には感ずべし、其語に曰く毎日耶蘇の仲間に分間二分間にて可なりを費やし、互に顔と顔と、心と心とを合すときは、忽ち全生涯に大變化を與ふべしと

善き事を思へ、然るときは自ら惡事を爲さざるべし、凡そ眞實なると、凡そ敬すべきと、凡そ正義なると、凡そ純潔なると、凡そ愛すべきと、凡そ賞讃すべきと、總て如何なる徳、如何なる譽にても宜しく之を念ふべし、蓋し罪は先づ心中に於て之を犯すにあらざれば行爲となりて顯はるゝものにあらず

「セネカ」曰く人に知らしむるを好まざる事を神に願ふ勿れ、神に知らしむるを好まざる事を人に求むる勿れと、去りながら若し吾等にして自ら顧みて此永遠無窮、廣大無邊なる天地間に於ける、蟬、粟粒に齊しき身なるを思へば、又「スベンサー」の歌ひし如くに、尋ねるも不可なきを知る、其歌とは

天には心配なるものある乎、此下界の動物に對して、天には愛情なるものある乎

彼の讚美歌人の微妙にも唱へられし如く、若し吾れ汝の天を思ひ、汝の指頭の働を思ひ、汝が作りし月と星とを思はん乎、汝が心を用ゆる人なるものは、果して何ものぞ、又汝が來りて宿どる人の子なるものは何ものぞ」

併し之に對する「コレリツヂ」の返答こそ大に吾等を慰むるに足るなれ、曰く「人若し之を喚ぶなれば、聖人は來りて助くべし、見よ、若天は總ての上を覆ふにあらずや」

求めよ、然るときは與へらるべし、尋ねよ、然るときは見出すべし、叩けよ、然るときは開けらるべし、吾等は斯の如くに約束せられ居るにあらずや

又、何事に限らず、汝が我名に於て願ふものは、吾れ之を爲すべし、若し汝、吾れに留まり、我語汝に留まり、而して汝が願ふ所あれば、吾れ汝の爲めに之を爲さん、尙ほ吾等は常に神に對しては、總ての心は隠れなく、總ての希望は知れ渡れり」と云ふを聞く、神は又、憂心の歎息をも輕侮せず、悲哀なるもの、望みをも輕侮せず、神は又、汝の爲めに注意するが故に、總て汝の身を舉げて之に

投するも可なりと聞く

吾等は己れの怠惰に對する申譯として、上天に助けを乞ふと相成らず、然れども、吾等は常に援助を確保せらるゝのみならず、又、神の家を建つるにあらざれば、人の家を建つる働きも其効なし、神の市中を守るにあらざれば、番人も無益なり」と告げられ居るなり、又、諸ろの善き賜と、諸ろの全き賜は、皆天より降り、光りある父より降る、父は變るとなく、又、轉動して顯はるゝ影もなき者なり」

耶穌の教義にては、來世安穩の爲めに現世を犠牲に供するに及はず、之に反して、命せられたるものを愛し、約せられたるものを求むるときは、來世同様、現世の幸福にも加ふる所あるべし、即ち宗教は日に我生涯を神聖ならしむるものなれば、現世の才智と、天國の才智との間には、實際何等の差異あるなし」  
「ソーサス、其弟子に告げて曰く、吾れは汝の、彼等を此世界より取り去ることを祈らす、唯、彼等を守りて、惡に陥らす勿らんとを祈ると」

「ブラットー」アリストートル「イピクテタス」セチカ「マアカス、アウレリユス」の書中には、貴ぶべき感想ありと雖も新約全書に在るが如き愛に關する神託あるなし

「ソーサス」は、其宗教は新なる宗教たるを語り、且つ曰く吾が汝に與ふる新訓戒は、汝は互に相愛せよと云ふに在り、吾れの汝を愛する如く、汝も亦互に相愛すべしと云ふに在り、汝若し互に相愛する時は、之に依りて人は皆、汝の我弟子たるを知らんと

又曰く吾れ此事を汝に語るは、我喜び汝に留まりて、汝の喜を充満せしめんが爲めなり、吾が汝を愛する如く、汝も互に相愛せよ、是れ我新訓戒なり、凡そ友朋の爲め、已れが生命を捐つるより大なる愛なし、若し汝にして何事にもあれ、我命する事を爲すなれば、汝は我友なり、今後吾れは汝を從僕とは喚ばざるべし、蓋し從僕は實に其主人の爲す事を知らざればなり、吾れ、先きに汝を友と喚べり、即ち總て在天の父より聞きし所を悉く汝に知らしむるに依

ると

耶蘇教の降下するや、在天の神には名譽なり、地上に在りては平和なり、人に對しては好意なりと宣告せられぬ

「ソーサス」は特に其教義を、幾度も寛恕せよ、敵と雖も愛すべしと云ひ及ぼし、  
「以て」モーゼスの教に對照せり

「汝の隣人は之を愛し、汝の敵は之を惡むべし」と云へるとあり、然れども予は言はんとす、汝の敵も之を愛し、汝を誼ふものも之を祝し、汝を惡むものも之に善を施し、汝を虐遇迫害するものも之れが爲めに神に祈るべしと、然るときは汝は在天の父の子たるを得べし、即ち彼は善者にも、惡人にも齊しく其の頭上に太陽を照らさしめ、正者にも不正者にも齊しく雨を降らさしむるなり、若し汝にして汝を愛するものを愛するとも、何の報か之れあらん、催租の吏と雖も亦之を爲すべし、若し汝にして獨り汝の兄弟の安否のみを訪ふとも、是れ人に比して何の優る所か之れあらん、催租の吏と雖も亦之を爲

## 人 の 一 生

すにあらずや、左れば天に在して完全なる父の如くに、汝も亦須らく完全なるべし。

三一八

吾等は豫て困難と、悲痛と、憂慮とを期せざるべからず、然れども、大痛苦の裏にも亦、光明あり、即ち大痛苦は耐忍を産み、耐忍は經驗を産み、經驗は希望を産むなり、又、吾等は現世の苦痛は、之を吾等に付與せらるゝ、光輝に比すれば物の數にも足らぬことを確保せらる、而して、其光輝とは即ち目視ることを得ず、耳聴くことを得ず、尙ほ人の心にも入り難きものなれども、神が已れを愛する人の爲めに常に準備し居るもの是なり。

「イピクテタス」曰く、總て外の喜樂に代ふるに、汝が神に従ひ居るとを自覺する樂みと、汝が言語のみならず、舉動に於ても、聖賢の行爲をなし居るとの樂みとを以てすべしと、去りながら人の其宗教の爲めに盡くす所は、寔に僅少なり、彼等は之に就て論争し、罵詈し、或は其隣人を嫌惡して之を焼き、或は宗教の爲めに戦ひ、其生命を之に抛つ、其他、殆んど爲さざるなしと雖も、絶て他



## 人 の 一 生

を寛恕する念あるなし

「トーマス、ケンピス」曰く小費を以て長途の旅行を爲し得べし、永遠不滅の生涯に向て曾て一動足の勞を取るもの少なきは何ぞや、又曰く書を讀み、悲みて沈黙し、神に祈り、男らしく困難を忍ぶ、永遠不滅の生涯は此等の總てに對して價值あるのみならず、尙ほ更に大なる効ありと、去りながら神の其爲め我等に要むる所は如何に少なきや、正義を爲し、慈悲を愛し、神と共に謙讓して歩せよといふの外神の我等に求むる所果して何事ぞや

縦し又神の吾等に期する所更に多く、要むる犠牲更に大に、爲めに現世に於ける諸事を拋擲せよと言はるゝにしても、此世は如何に短きものなるよ、雲と日とより生ずる露の、夏艸の上に飛ぶが如くに、世は神明の眼前に移りゆくなり、限りなき歳月の、駸々乎として迫り來るに連れて、此大地が誇る所の盛名は閃爍して忽ちに滅ぶゆくなり

吾等は素より正しき精神を以て願はざるべからず、左れども吾は汝の吾と

人 の 一 生

共に在ますが如くに、此世に存するとに勉むべし、何れの途にても吾が執る所は汝の爲めなるべし」

斯の如き精神は夫れ自らの應報なり、蓋し宗教の約束は必しも來世に限られたるものにあらず、現世に於て、今即ち蔭地に始まるなり、即ち吾等は各其心魂の中に活水の井を有するなり、若し之を純潔に保つなれば

「シヤロ」の語、眞なり、曰く若し善人を除けば誰れも幸福ならず、善人は總て幸福なりと云ふが實なれば、習ひ得て價あるもの哲學の外に何かあらん、又徳性より外に神聖なるもの何かあらんと

人は耐え得ざる迄に誘惑せらるゝものにあらず、然れども神は信あり、汝の忍ぶ能はざる迄も誘惑に苦ましめず、且つ汝に誘惑に耐ゆるとを得せしめん爲めに逃げ路を作り置けり、以上述ぶる所は疑もなく眞實なりと雖も之を信すると甚だ困難なるが如くに見ゆ

然れども人は弱きものなり、語に所謂る「汝は誘惑に陥らざる様、注意し、且つ

人 の 一 生

之を神に祈るべし、精神は假令ひ強固なりと雖も肉體は微弱なり」

吾等は完全を以て目的とせざるべからず、須らく天に在す我父の完全なるが如くに完全なるべし、然るときは其應報は即時にして又不測なり、凡そ吾等の困難は多く吾等自らより起る、人は無益の影に依りて自ら騒ぎ、又「ダニユル」の所謂る「我腦裏の幻想は吾を苦しむ、然れども亦心次第にて平和なるを得べし、乃ち其平和なるを得ざるは畢竟己れの過のみ、宗教は此世界に於ても尙ほ吾等に約するに休息、安全、心の平靜、事に無心配なることを以てす、天は常に未來と、遠距離とに在るのみならず、又吾等と共に在るなり

汝若し困憊せん乎、汝は「吾れに來れ、汝の苦役と、重荷とは、吾れ之に休息を與へん」且つ汝の心をして苦ましむる勿れ、神を信し、又吾れを信せよ」との誘導に逢ふことなき乎、疑惑を以て困難するは信仰の缺くる所以ぞかし

吾等は此世には眞に恐るべき原因を有するものにあらずと確保せられ居るなり、即ち縦令ひ鬼氣陰々たる幽谷を徘徊するも妖魔を恐るゝに及ばず

汝吾れに伴ひ、汝の管と杖とは吾れを慰むが故なり、又心配すべき原因をも有するものならず、即ち彼の空中の鳥を見よ、彼等は時かす、收めず、又貯めず、然るも在天の父は之を養ふ、汝果して彼等に比して優る所なき乎……汝又衣服に就て何の思ふ所ぞ、野に生ずる百合花を見よ、如何に彼等は生長する乎、勞せず、又紡かざるにあらずや、吾れ且つ汝に語らん、ソロモンが光榮赫々たる日に於ても、其装、尙ほ此等の一の如くなる能はざりき、若し果して神が、今日は野にあるとも、明日は窟に投せらるゝ彼の草芥をも、此の如くに裝ふなれば、何ぞ更に厚く汝を裝ふなくして可ならんや、汝の信仰何ぞ夫れ薄きや、

「汝は食ふものと、飲むものとを求むる勿れ、又思ひ感ふこと勿れ、是等は此世界の國民が總て之を求むるものなれば、汝の父は汝の之を要することを熟知せり、唯神の國を求めよ、然るときは是等の物は皆來りて汝の上に加はらん」

幾度も幾度も、全一の和程を數え、全一の約束を爲すべし、汝の寶を地上に積む勿れ、益々くひ鏽くさるゝ、盜は穿ちて之を竊まん、汝の寶を天上に積むべし、こゝには益々くひ鏽くさるゝともなく、盜も穿ちて竊むとなし、何となれば汝の寶の在る所には復た汝の心、存するが故なり、又「繼令ひ富にして増殖するとも、其上に汝の心を置くと勿れ、實際心配の種となるは富にして貧にあらず、富に頼りて天國に入らんとするは至大の困難なり」

彼の山上の説法に於て天國の約束を許るされし人は、慈仁、温厚にして寛恕、潔白なる徒是なり、

神は恐るべきにあらず、神は吾等の父なり、即ち完全なる愛情は恐怖の念を消滅せしむ

人を恐るゝの要なし、吾れは神を信す、人が何事を爲すとも更に恐るべきにあらず、

寔に何ものも吾等を害すべきにあらず、繼てのものは、神を愛する人の爲め

に善をなさんと共同して働く」

吾等は此生涯に於ける一切の面倒、心配、困難に當り、理解する能はざる神の平和が、吾等の心中に、神の智識と、神の愛を有つとを保證せられ居るなり、而して神の恩恵は常に吾れと共に留まるべし

而して此等の約束は吾等の總てに對するものにして、獨り富者や、大人や、智者や、學者に限らず一切平等なり、何となれば、神は人を貴ぶものにあらず、兒童を吾れに來らせよ、彼等を禁ずる勿れ、神の國に居るものは斯の如きものなり」

此等の利益は唯、吾等自らにあらずんば之を剝奪する者なきなり

「死も、生も、天使も、主長も、勢力も、現在の事物も、未來の事物も、或は高きも、或は深きも、又は或る他の動物も、吾等を我主、マイサス、クリイストに頼れる神の愛より、分離する能はざるものなるを信ず」

斯の如くにして、唯斯の如くにしてのみ、此生涯は快、調平和且つ幸福たるべし

きなり、無邪氣なるべし、且つ正しきものに注意せよ、斯の如くなれば遂に人を平和の境に到らしむべし、而して以て其名の傳記書中に載せらるべき人の中に齒するを望み得べきなり

又汝の生涯に於ける運命は如何にあるとも、又何れの處に投ぜらるゝとも、汝は幸福たるとを望み得べきなり、何となれば、天眼の觀る處は何れの所にも、賢者の爲めには安全なる港にして、又幸福なる天なればなり

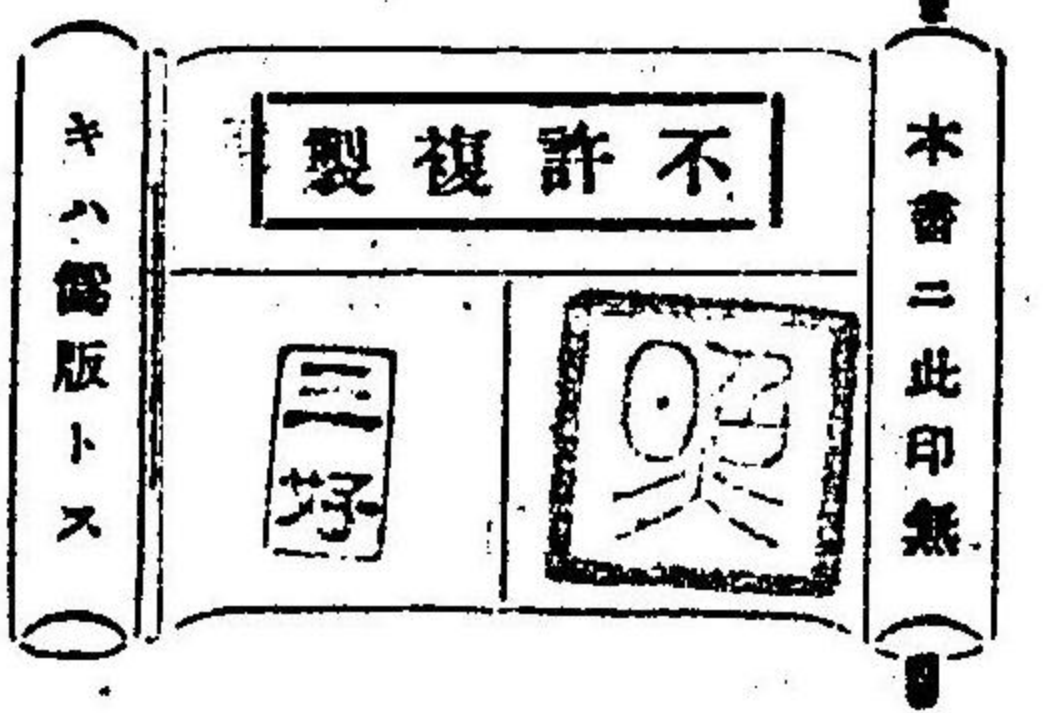
「キングスレイ」の貴重なる詞に曰く

善根を爲すべし、而して賢き人をして徒らに終日之を夢想せしむるとなく、貴き事を爲さしめ、以て生も、死も、未來をも打ちて一篇の雄大美麗なる歌となすべし

人 の 一 生 終

明治三十五年十一月十日印刷全年全月十五日發行  
 明治三十五年十一月二十日印刷全年全月廿日再版發行  
 明治三十六年二月十日印刷全年全月十五日三版發行  
 明治三十八年十月一日訂正四版印刷  
 明治三十八年十月一日訂正四版發行

人の一生奥付  
 正價六十五錢



著者 正木照藏

發行所 三好直藏

印刷者 横田五十吉

印刷所 横田活版所

東京市京橋區  
 銀座三丁目三番地

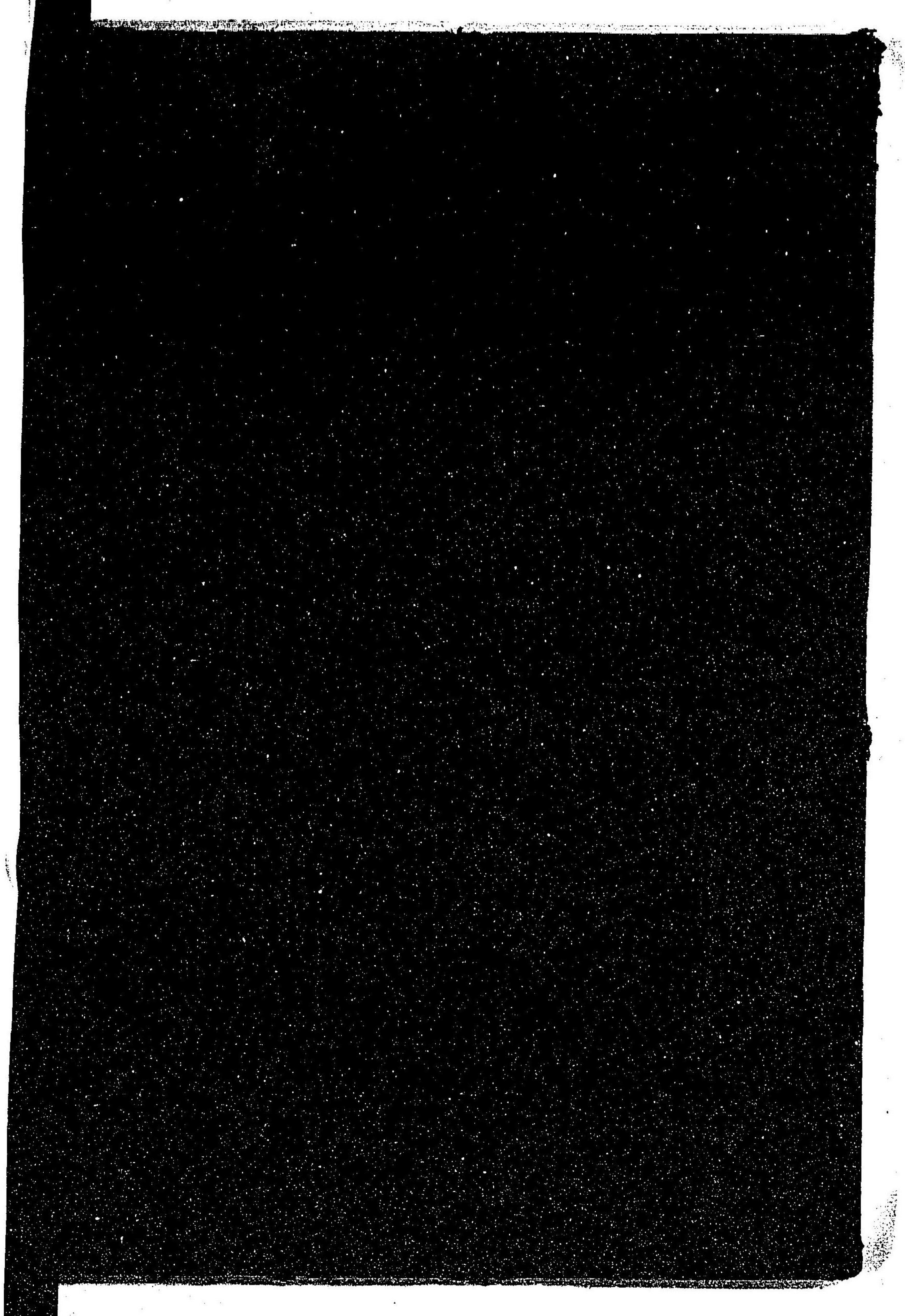
東華堂

發行所 大寶搦

東京堂 上田屋 岡崎屋 東海堂 六合館 目黒名古川瀬  
 同屋 野京都松 田大阪吉 岡 同盛文館 同積文社 同杉本









011254-000-0

99-170

人の一生 訂正版

エーヴベリ / 著  
正木 照藏 / 訳

M38

AAE-2901



